

高原町文化財調査報告書 第10集

た ぶ こ や ま  
榑 粉 山 遺 跡

— 古代遺構・遺物編 —

— 狭野地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1) —

2003. 3

みや ざき けん にし もろ かた ぐん  
宮 崎 県 西 諸 県 郡

たか はる ちょう  
高 原 町 教 育 委 員 会

た ぶ こ や ま  
榑 粉 山 遺 跡

— 古代遺構・遺物編 —

— 狭野地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1) —

2003. 3

みや ぎき けん にし もろ かた ぐん  
宮 崎 県 西 諸 県 郡

たか はる ちょう  
高 原 町 教 育 委 員 会

## 序 文

高原町は、宮崎県の南西部に位置しており、鹿児島との県境に天孫降臨の地として名高い高千穂峰をいただき、緑と水の豊かな町です。又、神武天皇がこの地でお生まれになり、幼少期をこの高原で過ごしたという伝承もあり、自然だけでなく歴史についても豊かな町であります。

高原町教育委員会では、平成11年度から2箇年で、狭野地区圃場整備事業に伴う梶粉山遺跡の発掘調査を実施しました。遺跡からは、縄文時代中期から後期の土器や石器、中世に作られた狩猟用の陥し穴など、高原町の歴史を考える上で重要な遺構・遺物が発見されました。特に、中世の陥し穴に関しましては、殆ど発見される事のない貴重なものでした。

今回の調査で得た様々な成果が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助になることを期待いたします。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり、御理解をいただきました土地所有者の方々をはじめ、御指導・御援助をいただきました関係諸機関並びに地元の方々に、心から御礼を申し上げます。

平成15年3月

高原町教育委員会  
教育長 外山方圀

## 例 言

1. 本書は、平成11・12年度に実施した、狭野地区における県営圃場整備事業(担い手育成型)に伴う榑粉山遺跡の発掘調査報告書(遺構・古代遺物編)である。
2. 本調査は、宮崎県西諸県農林振興局の委託を受けて、高原町教育委員会が主体となって実施した。第1次調査を平成11年11月17日から平成12年3月24日まで実施し、続く第2次調査を平成12年9月4日から平成12年12月22日まで実施した。又、整理作業については、第1次発掘調査開始時から同時進行で実施した。
3. 本遺跡における図面・空中写真については、下記の業者に業務委託した。  
地形・遺構測量・・・有限会社ジパングサーベイ  
空 中 撮 影・・・株式会社スカイサーベイ九州(調査時：株式会社スカイサーベイ)
4. 本報告書で使用している遺構写真・遺物実測図・遺物写真については大學が作成した。
5. 本報告書に掲載されている遺構は、S C：土坑(主に陥し穴)・S E：溝状遺構として略した。畠遺構については特に略号は使用していない。
6. 本報告書で使用している遺構実測図等の方位は、磁北を示す。
7. 本書の執筆・編集は大學が行った。
8. 発掘調査に伴って出土した遺物や図面・写真成果などは、高原町教育委員会で保管している。
9. 附編として掲載している自然科学分析については、株式会社古環境研究所に委託した。

# 本文目次

|      |  |
|------|--|
| 序文   |  |
| 例言   |  |
| 本文目次 |  |
| 挿図目次 |  |
| 表目次  |  |
| 図版目次 |  |

|                      |    |
|----------------------|----|
| 第Ⅰ章 調査の経過            | 1  |
| 第1節 調査に至る経緯          | 1  |
| 第2節 調査組織             | 4  |
| 第3節 遺跡の位置と歴史的環境      | 5  |
| 第4節 調査の概要と経過         | 9  |
| 1 調査の概要              | 9  |
| 2 調査の経過              | 11 |
| 第5節 榊粉山遺跡の基本層序       | 13 |
| 第Ⅱ章 高原スコリア直下面での遺構・遺物 | 19 |
| 第1節 はじめに             | 19 |
| 第2節 各区の出土遺構          | 20 |
| 1 A区の出土遺構            | 20 |
| 2 B区の出土遺構            | 20 |
| 3 C区の出土遺構            | 33 |
| 4 D区の出土遺構            | 33 |
| 5 E区の出土遺構            | 33 |
| 6 F区の出土遺構            | 36 |
| 7 G区の出土遺構            | 37 |
| 8 H区の出土遺構            | 37 |
| 第Ⅲ章 第Ⅳ層での遺構・遺物       | 49 |
| 第1節 はじめに             | 49 |
| 第2節 各区の出土遺構・遺物       | 50 |
| 1 A区の出土遺構・遺物         | 50 |
| 2 B区の出土遺構・遺物         | 50 |
| 3 C区の出土遺構・遺物         | 50 |
| 4 D区の出土遺構・遺物         | 57 |
| 5 E区の出土遺構・遺物         | 58 |
| 6 F区の出土遺構・遺物         | 58 |

|          |                    |    |
|----------|--------------------|----|
| 7        | G区の出土遺構・遺物         | 59 |
| 8        | H区の出土遺構・遺物         | 59 |
| 第IV章 まとめ |                    | 65 |
| 第1節      | 陥し穴遺構について          | 65 |
| 1        | はじめに               | 65 |
| 2        | 中世陥し穴遺構の類例         | 65 |
| 3        | 逆茂木の状況について         | 66 |
| 4        | 陥し穴の作成方法及び設置方法     | 66 |
| 第2節      | 畝状遺構について           | 67 |
| 1        | 遺構の概要              | 67 |
| 2        | 栽培作物について           | 67 |
| 3        | 遺構の年代              | 67 |
| 第3節      | 調査区出土の土師器・須恵器について  | 67 |
| 第4節      | 各火山灰の降下年代について      | 68 |
| 1        | 霧島大谷4～6テフラ(高原スコリア) | 69 |
| 2        | 霧島大谷1～3テフラ         | 69 |
| 附編       | 自然科学分析調査報告書        | 71 |

## 挿 図 目 次

|      |                     |    |
|------|---------------------|----|
| 第1図  | 榑粉山遺跡の位置及び周辺部遺跡位置図  | 2  |
| 第2図  | 榑粉山遺跡詳細位置図          | 3  |
| 第3図  | 榑粉山遺跡現況地形図及び調査区割り図  | 10 |
| 第4図  | 榑粉山遺跡調査区別土層図        | 15 |
| 第5図  | 榑粉山遺跡高原スコリア直下面地形図   | 17 |
| 第6図  | 榑粉山遺跡A区高原スコリア直下面地形図 | 19 |
| 第7図  | 榑粉山遺跡A区SC1実測図       | 21 |
| 第8図  | 榑粉山遺跡A区SC2実測図       | 22 |
| 第9図  | 榑粉山遺跡B区高原スコリア直下面地形図 | 24 |
| 第10図 | 榑粉山遺跡B1区SC3実測図      | 25 |
| 第11図 | 榑粉山遺跡B1区SC4実測図      | 26 |
| 第12図 | 榑粉山遺跡B1区SC5実測図      | 27 |
| 第13図 | 榑粉山遺跡B1区SC6実測図      | 28 |
| 第14図 | 榑粉山遺跡B2区SC7実測図      | 29 |
| 第15図 | 榑粉山遺跡B2区SC8実測図      | 30 |
| 第16図 | 榑粉山遺跡B2区SE1実測図      | 31 |

|      |                         |    |
|------|-------------------------|----|
| 第17図 | 榑粉山遺跡C区高原スコリア直下面地形図     | 33 |
| 第18図 | 榑粉山遺跡D区高原スコリア直下面地形図     | 34 |
| 第19図 | 榑粉山遺跡E区高原スコリア直下面地形図     | 35 |
| 第20図 | 榑粉山遺跡E区SC9実測図           | 36 |
| 第21図 | 榑粉山遺跡F区高原スコリア直下面地形図     | 37 |
| 第22図 | 榑粉山遺跡F区SC10実測図          | 39 |
| 第23図 | 榑粉山遺跡F区SC11実測図          | 40 |
| 第24図 | 榑粉山遺跡F区SC12実測図          | 41 |
| 第25図 | 榑粉山遺跡F区SC13実測図          | 42 |
| 第26図 | 榑粉山遺跡H区高原スコリア直下面地形図     | 43 |
| 第27図 | 榑粉山遺跡H区SC14実測図          | 44 |
| 第28図 | 榑粉山遺跡H区SC15実測図          | 45 |
| 第29図 | 榑粉山遺跡第IV層上面地形図          | 47 |
| 第30図 | 榑粉山遺跡A区第IV層上面地形図        | 49 |
| 第31図 | 榑粉山遺跡B区第IV層上面地形図及び遺構図   | 51 |
| 第32図 | 榑粉山遺跡B区第IV層上面出土遺物分布図    | 52 |
| 第33図 | 榑粉山遺跡B区第IV層上面出土遺物実測図    | 53 |
| 第34図 | 榑粉山遺跡C区第IV層上面地形図        | 53 |
| 第35図 | 榑粉山遺跡C区第IV層上面出土遺物分布図    | 54 |
| 第36図 | 榑粉山遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(1) | 55 |
| 第37図 | 榑粉山遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(2) | 56 |
| 第38図 | 榑粉山遺跡C区第IV層上面出土遺物実測図(3) | 57 |
| 第39図 | 榑粉山遺跡D区第IV層上面地形図及び遺構図   | 58 |
| 第40図 | 榑粉山遺跡E区第IV層上面地形図        | 59 |
| 第41図 | 榑粉山遺跡F区第IV層上面地形図及び遺構図   | 60 |
| 第42図 | 榑粉山遺跡F区第IV層上面出土遺物分布図    | 61 |
| 第43図 | 榑粉山遺跡F区第IV層上面出土遺物実測図    | 61 |
| 第44図 | 榑粉山遺跡H区第IV層上面地形図及び遺構図   | 62 |
| 第45図 | 榑粉山遺跡H区第IV層上面出土遺物分布図    | 62 |
| 第46図 | 榑粉山遺跡H区第IV層上面出土遺物実測図    | 63 |

## 表 目 次

|    |              |    |
|----|--------------|----|
| 表1 | 榑粉山遺跡出土遺物観察表 | 64 |
|----|--------------|----|

## 図 版 目 次

- 図版1 高千穂峰側から榑粉山遺跡B2・C・D区及び日向灘方面を望む  
東側より榑粉山遺跡E・F・H区及び高千穂峰を望む
- 図版2 B2・C・D区全景(完掘状況)、E・F・G・H区全景(完掘状況)
- 図版3 A区全景(完掘状況)、B1区全景(完掘状況)
- 図版4 B2区全景(畝状遺構完掘状況)、C区全景(完掘状況)
- 図版5 D区全景(畝状遺構完掘状況)、D区全景(完掘状況)
- 図版6 E区全景(完掘状況)、F区全景(畝状遺構完掘状況)
- 図版7 F区全景(完掘状況)、H区全景(畝状遺構完掘状況)
- 図版8 A区表土除去状況、A区高原スコリア直下面検出状況、A区高原スコリア直下面状況
- 図版9 A区SC1埋土半截状況、A区SC1遺構完掘状況、A区SC2検出状況
- 図版10 A区SC2遺構完掘状況、A区SC2逆茂木断ち割り状況、A区IV層上面検出状況
- 図版11 A区完掘状況、A区層序、B1区高原スコリア直下面完掘状況
- 図版12 B1区高原スコリア直下面完掘状況、B1区土壌分析状況、B1区SC3検出状況
- 図版13 B1区SC3遺構完掘状況、B1区SC4検出状況、B1区SC4埋土半截状況
- 図版14 B1区SC4逆茂木断ち割り状況、B1区SC5検出状況、B1区SC5逆茂木断ち割り状況
- 図版15 B1区SC6検出状況、B1区SC6埋土半截状況、B1区SC6遺構完掘状況
- 図版16 B1区SC6逆茂木断ち割り状況、B1区層序、B2区表土除去状況
- 図版17 B2区高原スコリア直下面検出状況、B2区高原スコリア直下面状況、B2区SC7検出状況
- 図版18 B2区SC7埋土半截状況、B2区SC7埋土除去状況、B2区SC7遺構完掘状況
- 図版19 B2区SC7逆茂木断ち割り状況、B2区SC8検出状況、B2区SC8埋土半截状況
- 図版20 B2区SC8埋土除去状況、B2区SC8遺構完掘状況、B2区SC8逆茂木断ち割り状況
- 図版21 B2区SE1埋土除去状況、B2区SE1埋土層序(SC8横)、B2区SE1埋土層序(調査区南側壁)
- 図版22 B2区畝遺構検出状況(1)、B2区畝遺構検出状況(2)、B2区畝遺構土器出土状況
- 図版23 B2区畝遺構土器出土状況、B2区畝遺構完掘状況(1)、B2区畝遺構完掘状況(2)
- 図版24 B2区層序、C区検出面状況、C区第IV層面掘削状況



- 図版25 C区土師器出土状況(1)、C区土師器出土状況(2)、C区完掘状況
- 図版26 C区完掘状況、C区層序、D区表土掘削状況
- 図版27 D区高原スコリア直下面状況、D区畝遺構検出状況、D区畝遺構掘削状況
- 図版28 D区畝遺構完掘状況、D区層序、E区表土掘削状況
- 図版29 E区高原スコリア直下面検出状況、E区高原スコリア直下面(検出面)状況、E区SC9検出状況
- 図版30 E区SC9遺構完掘状況、E区SC9逆茂木断ち割り状況、E区層序
- 図版31 F区表土掘削状況、F区高原スコリア直下面状況、F区SC10検出状況
- 図版32 F区SC10埋土半截状況、F区SC10遺構完掘状況、F区SC10逆茂木断ち割り状況
- 図版33 F区SC11検出状況、F区SC11埋土半截状況、F区SC11逆茂木断ち割り状況
- 図版34 F区SC12検出状況、F区SC12遺構完掘状況、F区SC12逆茂木断ち割り状況
- 図版35 F区SC13検出状況、F区SC13埋土半截状況、F区SC13炭化物(逆茂木)出土状況
- 図版36 F区SC13遺構完掘状況、F区SC13逆茂木断ち割り状況、F区第IV層検出状況
- 図版37 F区畝遺構検出状況(1)、F区畝遺構検出状況(2)、F区畝遺構掘削状況
- 図版38 F区畝遺構層序、F区畝遺構完掘状況、F区須恵器出土状況
- 図版39 F区土壌分析状況、F区層序、G区第1トレンチ高原スコリア直下面状況
- 図版40 G区第2トレンチ高原スコリア直下面状況、G区第1トレンチ第IV層上面状況、H区表土掘削状況
- 図版41 H区表土掘削状況、H区高原スコリア直下面状況(1)、H区高原スコリア直下面状況(2)
- 図版42 H区SC14検出状況、H区SC14埋土半截状況、H区SC14遺構完掘状況
- 図版43 H区SC14逆茂木断ち割り状況、H区SC15検出状況、H区SC15埋土半截状況
- 図版44 H区SC15遺構完掘状況、H区SC15工具痕検出状況、H区SC15逆茂木断ち割り状況
- 図版45 H区第IV層検出状況、H区畝遺構検出状況(1)、H区畝遺構検出状況(2)
- 図版46 H区畝遺構検出状況(3)、H区畝遺構検出状況(4)、H区畝遺構掘削状況
- 図版47 H区畝遺構完掘状況、H区畝遺構炭化木検出状況、H区畝遺構炭化木完掘状況
- 図版48 H区畝遺構炭化木完掘状況、H区層序、楯粉山遺跡出土土師器(1~3)
- 図版49 楯粉山遺跡出土土師器(4~18)
- 図版50 楯粉山遺跡出土土師器・須恵器(19~24)

# 第 I 章 調査の経過

## 第 1 節 調査に至る経緯

高原町は、宮崎県の南西部に位置し、東西約18km・南北10kmと東西に長く、中心部でややくびれており、面積は85.42km<sup>2</sup>である。市街地の標高は約200m前後、町内の殆どは広大な台地とその周囲を巡る谷で占められ、そのうち山林・原野は、町域の約50%を占めている。

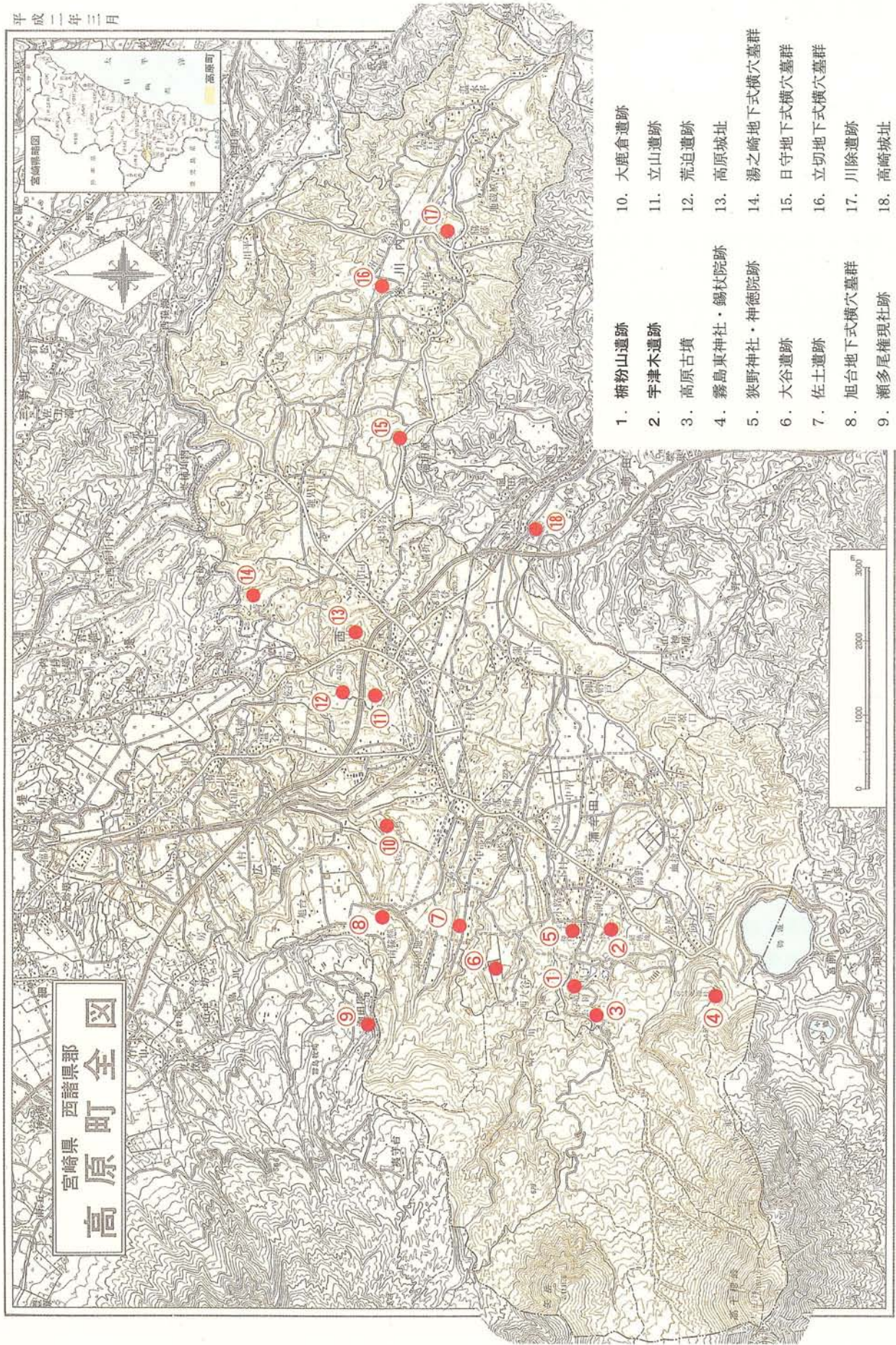
今回、調査の対象となった狭野地区は、高原町の南西部、霧島連山の東麓に位置している。連山から東に向かって小規模な舌状の尾根が多く伸び、尾根の間には高低差約10mの谷が巡っている。集落や田畑等は、尾根上という限定された場所に形成されている。このように、非常に起伏に富んだ地形であるため、農業経営などに支障を来していた。このため、高原町では、終戦後間もない時期から耕地整理が積極的に進められた。狭野地区においても圃場整備に関する話は平成7年度辺りから話されていたが、対象面積が広大なため、具体的に計画が成立していたわけではなかった。しかし、平成10年度に入り計画が具体化したため、平成7年度の県通達(県営圃場整備については試掘調査は県が、本掘調査は市町村が担当するという内容)に基づき、県文化課の担当者に試掘調査などの協議を申し入れたが、通達に基づいた対応が全く成されなかったため、やむを得ず、西諸県農林振興局・町農村整備課・狭野土地改良組合・町社会教育課の四者で協議が行われた。しかし、(1)このメンバーの中で発掘調査を経験しているのが農林振興局のみだった、(2)高原町では圃場整備事業に伴う発掘調査がこれまで行われた事はなかった、(3)狭野地区での遺跡の性格が不明確、(4)事業策定中で一部の地権者の同意が取れていなかった、などの理由により、試掘調査地の選定が困難な中、土地改良並びに地権者の協力を得て、27箇所を試掘調査を実施した結果、事業区内で遺跡が2箇所確認された<sup>(1)</sup>。1箇所(梶粉山遺跡、調査時は狭野第3遺跡)は遺跡地図<sup>(2)</sup>に周知済であったが、もう1箇所(宇津木遺跡)については未周知であった。しかしその一方で、遺跡地図に周知されている箇所を調査したにも関わらず、遺跡が全く発見できなかった箇所もあり、狭野地区での遺跡の立地の不明確さ(必ずしも水源を保有している舌状の台地に遺跡が形成されるとは限らない)を臆気ながら掴む事が出来た。

この結果を踏まえて、平成11年8月10日には、上記の四者に県文化課の担当者を加えて調査に関する具体的な協議が行われた。その協議により、

- (1) 梶粉山遺跡が含まれている地区については、圃場整備事業における水路の要であるため、工事を避ける事が出来ないという判断となり、記録保存の措置を執る。
- (2) 遺跡の大半が水田地で、すでに作付けされているので、調査は収穫後の11月から実施する。
- (3) 面積や遺物量から考えて単年度での調査は無理なので、11・12年度の2回に分けて調査を実施する。平成11年度調査予定地については、昨年度の試掘調査から漏れていたため、協議終了後の8月から9月にかけて確認調査を実施する。
- (4) 工事そのものは平成12年度から始まるので、又、もう一度作付けするため、11年度調査分については、調査終了後に一旦現状復帰する。

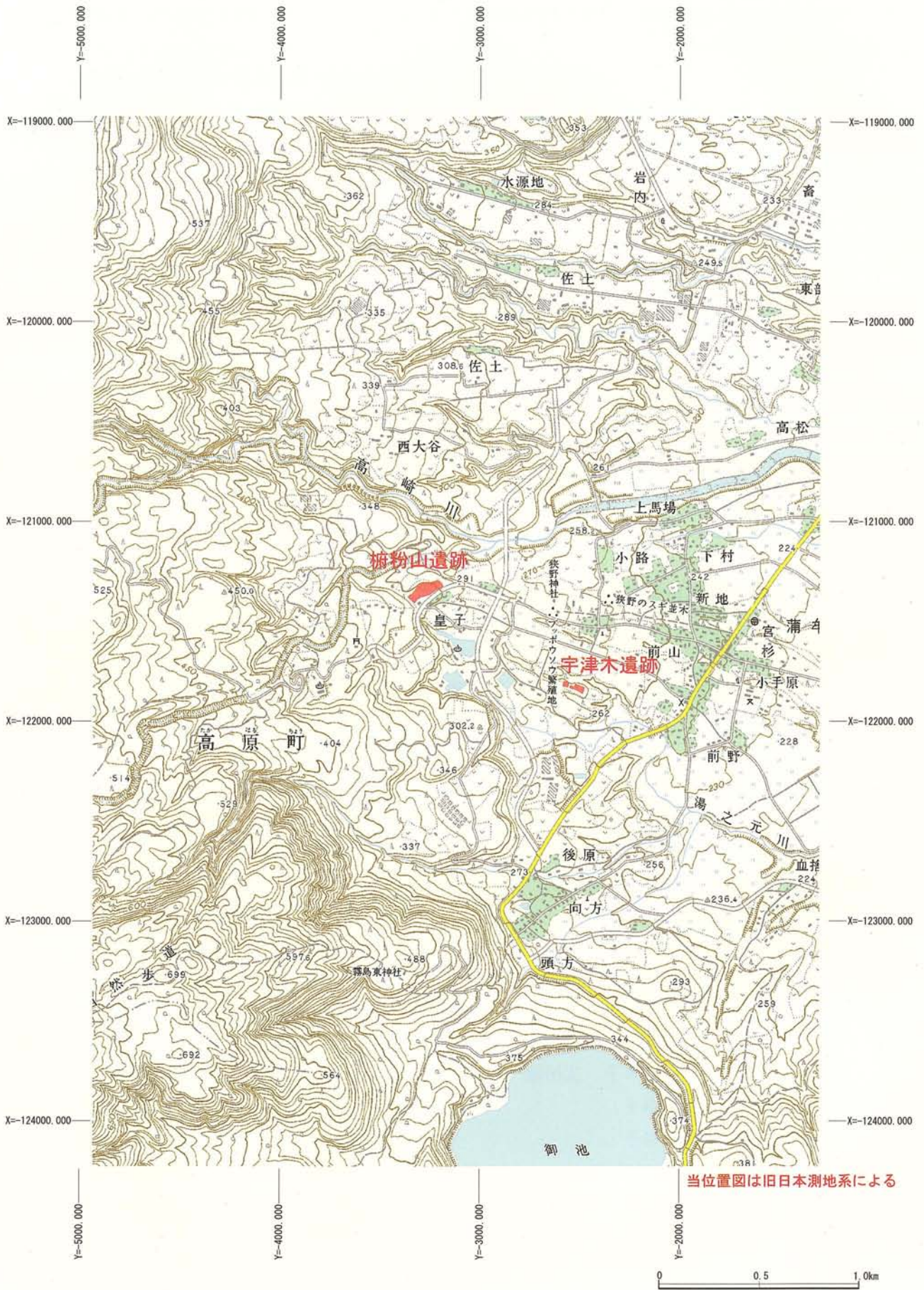
という方針が決まった。それを受けて、平成11年8月30日から10月1日まで11年度調査予定地の確認調査を実施し、遺構・遺物包含層等の把握に努めた。その結果、以前の試掘調査





第1図 榑粉山遺跡の位置及び周辺部遺跡位置図





第2図 楠粉山遺跡詳細位置図

では検出されなかった古代の内黒土器や坏・高台付椀が出土し、又、縄文土器の出土層等も特定する事が出来た(1)。

その成果を受けて、高原町教育委員会は平成11年11月2日付で西諸県農林振興局と委託契約を締結し、平成11年11月17日から同12年3月24日まで、遺跡の総面積9,000㎡のうちの半分の発掘調査を実施した。

そして平成12年度は、同年5月10日、上記の四者に県土改連や町農業振興課等を加えて圃場整備に関わる全体会議が行われた。その会議の結果、12年度の調査予定地にはすでに転作作物が植えられているので、8月末の第1回目の刈取り終了後に調査を実施する事になった。そして平成12年7月25日付で振興局と再び委託契約を締結し、転作作物の収穫が終了した平成12年9月4日から同年12月22日まで残りの部分についての発掘調査を実施した。

遺物整理については、発掘調査実施直後から開始している。

(1) 大學康宏 2001「町内遺跡I」『高原町文化財調査報告書』第3集 高原町教委

(2) 大學康宏 1998「高原町遺跡詳細分布調査報告書」『高原町文化財調査報告書』第3集 高原町教委

## 第2節 調査組織

### ○調査主体 高原町教育委員会

|          |                        |
|----------|------------------------|
| 教育長      | 正入木 久 男(～平成14年1月)      |
|          | 外山 方 圀(平成14年1月～)       |
| 社会教育課 課長 | 増田 賢 一(～平成11年度)        |
|          | 久保田 芳 人(平成12年度～平成13年度) |
|          | 境 和 彦(平成14年度)          |
| 係長       | 篠原 弘 二(～平成12年度)        |
|          | 温谷 文 雄(平成13年度)         |
|          | 益本 一 博(平成14年度)         |

○調査員 社会教育課 主事 大學 康 宏

### ○作業員

(平成11年度)

発掘作業員 朝地利夫 大迫為男 大迫テルヨ 小野信夫 川畑英春 久保田カツ子  
黒木富喜男 黒田修昭 黒田妙子 高原實 高原洋子 坂口光子  
大鼓重雄 中馬和子 寺坂ミキ 寺坂安美 唐峯正子 馬場照雄  
広田シズ子 広田毅 福崎三男 丸山和夫 丸山妙子 三角園榮子  
山縣静子

整理作業員 宮田信子

(平成12年度)

発掘作業員 内村文男 内村勇一郎 大迫為男 大迫テルヨ 小野信夫 川畑英春  
久保田カツ子 黒田修昭 黒田妙子 高原實 高原洋子 坂口光子  
坂口由久 大鼓重雄 中馬和子 寺坂ミキ 寺坂安美 中原文子  
馬場照雄 広田シズ子 広田毅 丸山和夫 丸山妙子 山縣静子

- 山口江美子
- 整理作業員 外菌チドル 三角園榮子 宮田信子  
(平成13年度)
- 整理作業員 外菌チドル 三角園榮子 宮田信子  
(平成14年度)
- 整理作業員 外菌チドル 三角園榮子 宮田信子
- 調査区内測量 有限会社ジパングサーベイ  
赤塚光一 高佐裕一 米久田真二 中西啓二
- 調査区空中撮影 株式会社スカイサーベイ九州(調査時：株式会社スカイサーベイ)  
森孝子 森馨
- 自然科学分析 株式会社古環境研究所  
杉山真二 早田勉 堀口譲
- 調査指導 宮崎県教育委員会文化課  
長津宗重(平成10年度)  
東 憲章(平成11年度)  
吉本正典(平成12年度)  
飯田博之(平成13年度)  
宮崎県埋蔵文化財センター  
岩永哲夫 菅付和樹 柳田宏一
- 調査協力  
事業側 宮崎県西諸県農林振興局  
農地整備課 主 査 盛永美喜男(～平成13年度)  
谷口司(平成14年度)  
狭野土地改良組合 理事長 安田時弘  
理 事 下村嘉宏 反田吉巳 新地和廣 岩元茂明  
日高鉄男 坂田正嗣 外村善昭 寺前省二  
高原町農村整備課 課 長 亀田光二  
係 長 氏益幸生  
技 師 中屋敷一郎(～平成13年度)  
田中伸一郎(平成14年度)
- 地権者 奥山恵子 反田光男 日高景吉

### 第3節 遺跡の位置と歴史的環境(第1・2図)

榑粉山遺跡は、高原町市街地の西南西、高千穂峰から続く標高約300mの尾根上に立地している。終戦直後までは小高い山で、線香の生産が行われていた。線香の材料には主にタブ(榑)の木の皮が利用され、そこで伐採から皮剥・製粉まで行うなど、木場のような光景であったという。それによって、「榑粉山」という地名になったと聞き及んでいる。しかし、戦後の開拓に伴い、旧来の地形とは大きく変貌を遂げ、現在に到る。

遺跡の西側には、県指定史跡の高原古墳が6基ある。昭和初期に指定されたので詳細は不明



だが、墳丘を持った地下式横穴墓の可能性が高い。又、高原古墳の川を挟んで北側、通称「開拓地」と呼ばれている所にも、同様の土饅頭が多く見られる。中には直径20～30m規模のものもあるが、未調査である。

高原町では、このような高所且つこのような山に近い箇所で形成された遺跡はあまりない。故に、当初は、霧島山系に関係した山岳宗教の拠点的な集落と考えられてきた。というのは、その西側にある高千穂峰は、近世には「霧嶋山」と呼ばれ、信仰の対象となった山だからである。

高千穂峰は、『記紀』に登場する天孫降臨の地として知られている。その伝承に沿うかのように山頂には「天の逆針」が立てられている。立てられたのは江戸時代辺りと推定されるが、詳細は不明である。高千穂峰は、主に北部の小林方面から南東部の都城盆地の辺りで山岳信仰の対象として崇拝されてきた。前述の地には、華立(霧島山の遙拝所)が数多く存在する。

伝承では天孫降臨の地とされているが、その実体は不明である。朝廷の編纂した記録には、「霧嶋岑神」の名称で登場する。承和4年(837)には、日向国の都農神・妻神・江田神と共に官社に列せられ、従五位上の位が与えられた(『続日本後紀』「承和四年八月壬辰朔」条)。続く天安2年(858)には従四位下に昇格している(『日本三代実録』「天安二年十月己酉」条)。そういった経緯もあり、平安時代初頭から修行の場として認識されるようになった。文献に残る最古の霧島山での修行者は、比叡山の僧侶性空である。性空は延喜10年(910)に京都で生まれ、36歳で比叡山延暦寺の慈恵大師良源に師事して出家、九州を中心に修行し、康保3年(966)に播磨国書写山に円教寺を創建した。『朝野群載』等では、36歳で出家した後、4年間を霧島山で修行し、その後肥前国背振山へ修行の場を移したとある。霧島山周辺の寺社も、性空を開祖或いは中興の祖としている所が殆どである。しかし、どの書物も「霧嶋」と記しているのみで、具体的な場所は不明である。なお、高千穂峰の東南部にある御池と呼ばれる火口湖があるが、江戸時代末期に編纂された『三国名勝図會』によると、当時、御池には、松・軀瀬(むくらせ)・皇子(おうじ)・劔崎(つるぎさき)・刈茅(かるかや)・柳・護摩壇(ごまんだん)、7つの港があり、そのうち護摩壇港の上には、性空上人が護摩行を行ったという伝承がある。

この伝承から当地近辺の状態を推察した場合、平安時代初頭には、すでに山そのものが神格化しており、修行の場になる程の奥深い森林であった事を窺わせる。承平5年(935)頃に成立したとされる『倭名類聚抄』には、「諸縣(牟良加多)郡」のうちとして、「財部・縣田・菰生(宇利布乃)・山鹿・穆佐・八代・大田・春野」の八郷が挙げられている。この内、財部は現在の高鍋町、菰生は現在の宮崎市瓜生野、穆佐は高岡町と思われる。この八郷のうち、当地方を指しているのは、現在のところ春野郷という説が有力である。

このように、歴史のその殆どの時期が深い山林地帯であったため、近年に至るまで連続と続く歴史は無いに等しい。実際に史料に登場するのは16世紀以降で、霧島山の噴火による壊滅も相俟って、基本的な文化要素については、近世以降に成立したと推測される。

次に遺跡の成果を以て当地の状況を推測すると、まず、高原町に関してのみ言えば、旧石器時代の遺跡は確認されていない。シラスをはじめ、霧島山の火山灰が台地を厚く覆っているため、現在のところ確認できた最も古い時期は縄文時代前期である。高原町の東側の後川内地区に位置する川除遺跡では、古代の畠遺構を構成する土層から轟B式の破片が数点確認

された<sup>(1)</sup>。又、佐土遺跡では、表採資料の中に曾畑式が数点確認された<sup>(2)</sup>。現在のところ、この2遺跡のみである。

縄文時代中期になると、徐々に遺跡が増加する。昭和43年に発掘調査され、高原町で初めて縄文・弥生時代の遺物が層位的に確認された高原畜産高校遺跡<sup>(3)</sup>、今回調査された梶粉山遺跡などで阿高式土器が出土した。

縄文時代中期末から後期に入ると、遺跡の数(というよりも遺物量)が爆発的に増大する。高原町で発見された遺跡の殆どが縄文時代後期の土器を含んでいるといっても過言ではない。主な遺跡としては、前述した高原畜産高校遺跡、正式な発掘調査を踏まえてはいないが莫大な表採資料を抱える大谷遺跡<sup>(4)</sup>や今回調査した梶粉山遺跡などである。しかし、その殆どが包含層からの出土であり、遺構は検出されていない。又、型式についても、ごく一部では言及されている<sup>(5)</sup>ものの、不明な点が多い。

これより先、縄文時代晩期頃から遺跡数が激減する。特に、弥生時代の遺跡は殆ど見られない。理由の一つに挙げられるのは、調査数の少なさによる。特に高原町では開発が早い時期に行われたため、主要な遺跡の殆どが調査の機会なく破壊されてしまっている。弥生時代から古墳時代にかけての集落遺跡が調査されたのは、立山遺跡・荒迫遺跡のみである。このうち、荒迫遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての住居址や掘立柱建物・土坑・溝などの遺構が検出された<sup>(6)</sup>。しかし、遺構の検出状況から密集した集落とは言い難い。又、荒迫遺跡の、高速道路を挟んだ南側に位置する立山遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡が30基近く検出され、さらに軽石製の炉や埋甕などの住居跡付随遺構が検出された<sup>(7)</sup>。

高原町における古墳時代の遺跡は、集落遺跡よりも地下式横穴墓の方が著名である。高原町では、これまでに4群107基が検出されている。その内訳は、湯之崎地下式横穴墓群1基・旭台地下式横穴墓群13基・日守地下式横穴墓群31基・立切地下式横穴墓群72基である。

湯之崎地下式横穴墓は、昭和47年11月に整地作業中に発見・調査された。1基のみの検出だったが、4体程の埋葬人骨が見られた他、刀子・鉄鏃・鉈など11点の副葬品が見られた<sup>(8)</sup>。

旭台地下式横穴墓群は、昭和50年12月に土木作業中の崩落により発見・調査されたが、殆どが天井部落下による損傷を受けるなど残存状況はあまり良くないものの、9号墓では鉾・鉄釧が出土した他、全体として約100点近い鉄製副葬品が出土した<sup>(9)</sup>。後の研究により、埋葬位置から直線配置埋葬のA群、円形配置のB～D群に分類され、他群に較べてのA群の優位性が指摘されている<sup>(10)</sup>。

日守地下式横穴墓群は、昭和54・55年に渡る土砂採取中に発見・調査された。発見された8基の中には、束柱のレリーフの他、シラスを敷いた屍床なども見られた<sup>(11)</sup>。その後隣接地で確認調査が行われた結果、10基の地下式横穴墓・土器溜りなどが検出された<sup>(12)</sup>。又、平成9年2月には道路を挟んだ南側で2基検出され、蛇行剣や異形鉄鏃等が出土した<sup>(13)</sup>。平成10・11年には天理大学考古学研究室による電気・レーダー探査が行われ、未発掘の状態での墳丘復元などが試みられた<sup>(14)</sup>。

立切地下式横穴墓群は、昭和63年12月に圃場整備中に発見され、2箇年に渡り発掘調査が行われた結果、72基というこれまでにない量の地下式横穴墓が検出された。群内には赤色顔料を使用して垂木や棟木を表現したものが多く見られた他、レリーフ状の束柱なども見られた。



又、埋葬人骨77体・鉄刀武器277点・装身具123点など、副葬品も豊富に出土した(15)。

これ以後、遺跡の発見例は急激に減少し、地下式横穴墓の下限である6世紀前半から9世紀に至るまでは歴史的に全くの空白となる。前述の通り、当地域は古代朝廷において神格化された霧嶋岑神の住まいである霧島山の麓に位置し、「諸縣郡春野郷」と推定される地域である。当時はすでに人の生活を受け入れられないような山林地帯だったのではないだろうか。

しかし、9世紀に入ると、現在の町域の数箇所ですべて同時多発的に開墾が行われている。住居跡などはあまり検出されないのに対し、畝と思われる畝状遺構が多数検出されている。この時期の遺跡のうち発掘調査が行われたのは、荒迫遺跡・立山遺跡・大鹿倉遺跡・川除遺跡・大谷遺跡・榑粉山遺跡だが、この6遺跡のうち畝状遺構が検出されたのは、荒迫遺跡・川除遺跡・大谷遺跡(16)・榑粉山遺跡の4遺跡である(17)。このうち、最も広範囲で検出されたのが荒迫遺跡である。しかし、長期間に渡って耕作されたのではなく、9世紀後半から10世紀にかけてのごく数年間に使用されたと推測されている。

中世では、現在の町域は<sup>まさき</sup>真幸院(現在のえびの市近辺)あるいは三俣院(現在の三俣・高城町近辺)に含まれていたと推定される(18)。又、日向国と大隅国の国府付近を結ぶ要衝である事から、日向中部の伊東氏・真幸院の北原氏・薩摩国の島津氏の三氏による争いが続き、現在の市街地に位置する高原城は、三氏の勢力争いの舞台となった。16世紀半ばに入ってから伊東氏の領地となったが、天正4年(1576)8月に、島津義久・義弘ら島津勢が攻め落とすと共に周辺諸城も落城し、島津氏の領地となった(19)。豊臣秀吉の九州平定以後、島津久保、次いで島津義弘の領地となるなど変動するが、以後薩摩藩領として定着する。その後領内は地頭制が敷かれ、地頭については鹿児島から派遣された。歴代の地頭では、秀吉の九州平定で抵抗した上原長門守尚近・関ヶ原の戦いで東軍の捕虜となった新納旅庵・同戦で戦死した入来院又六・お由羅騒動で流罪となった名越左源太、などがいる。高原の領域は、地頭制施行当初は麓村(高原村)・蒲牟田村・入木(後川内)村(以上、現高原町)、前田村・大牟田村・笛水村・江平村(以上、現高崎町)だが、延宝8年(1680)の領域変更に伴い、前田・大牟田・江平が高崎郷として独立する代わりに紙屋郷水流村(現都城市)・小林郷広原村が編入、新しく五村で構成され、幕末に到る。当時の高原郷の記録である『高原所系図壺冊』には、度々「無地頭」という記述が見られ、地頭不在を窺わせる。さらに、19世紀前半頃には高原郷そのものに地頭が派遣されるのではなく、周辺の数郷を地頭一人による一括支配体制が行われた。当初は高原に周辺の五ヶ郷(小林・加久藤・飯野・須木・野尻)を併せた六ヶ郷請持体制となったが、その後、高原に小林・須木・野尻・高崎を併せた五ヶ郷請持に再編成された(20)。この前半の六ヶ郷・後半の五ヶ郷請持体制が後の西諸県郡の基礎に繋がるものと思われる。

## 【参考文献】

- (1) 大學康宏 1999「川除遺跡」『高原町文化財調査報告書』第5集 高原町教委
- (2) 都城市教委文化課の栗畑光博氏のご教示による。
- (3) 石川恒太郎 1972「高原町縄文期包含層調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第16集 宮崎県教委  
日高正晴 1989「高原畜産高校遺跡」『宮崎県史 資料編 考古1』宮崎県
- (4) 大學康宏 1999「大谷遺跡表採縄文土器資料」『高原町文化財調査報告書』第4集 高原町教委

- (5) 横手浩二郎 1994「宮崎県西諸県郡高原町大谷遺跡表探の縄文土器」『南九州縄文通信』№8 南九州縄文研究会
- (6) 和田理啓・久木田浩子 1998「荒迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第11集
- (7) 宮崎県埋蔵文化財センターの永友良典氏のご教示による。
- (8) 石川恒太郎 1973「高原町湯ノ崎地下式古墳調査報告書」『宮崎県文化財調査報告書』第17集 宮崎県教委
- (9) 石川恒太郎・日高正晴・岩永哲夫 1976「旭台地下式古墳発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第19集 宮崎県教委
- (10) 中野和浩 1998「地下式横穴墓の群構造」『宮崎考古』第16号 宮崎考古学会
- (11) 岩永哲夫 他 1980「日守地下式横穴(古墳)54-1~4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第22集 宮崎県教委  
岩永哲夫 他 1981「日守地下式横穴(古墳)55-1~4号発掘調査」『宮崎県文化財調査報告書』第23集 宮崎県教委
- (12) 岩永哲夫 1981「日守地下式古墳群確認調査」『宮崎県文化財調査報告書』第24集 宮崎県教委
- (13) 大學康宏 1999「日守地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書』第4集 高原町教委
- (14) 置田雅昭 2001「宮崎県高原町日守地下(立坑)式横穴墓群」『墳丘のない墓の探査研究』平成9-12(1997-2000)年度科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))実績報告書(補訂) 天理大学遺跡探査チーム
- (15) 面高哲郎・長津宗重他 1991「立切地下式横穴墓群」『高原町文化財調査報告書』第1集 高原町教委
- (16) 宮崎県教育委員会文化課編 1997「大谷遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第40集 宮崎県教委
- (17) 立山遺跡については、畝状遺構が検出される土層での精査を実施していないため、詳細は不明。
- (18) 島津家文書『神社調 諸縣郡之部一』では、真幸院の領域を「飯野・加久藤・小林・吉田・馬関田」の五邑としている一方、町内の富田家文書『劔之巻』(「嘉永四年書写」の奥書)では、「三俣院霧嶋」と記しているが、双方の明確な領域については、未だ不明である。
- (19) 大學康宏 2001「高原城跡の縄張り調査」『高原町文化財調査報告書』第8集 高原町教委
- (20) 近世における高原郷の情勢については、永濱家文書「高原所系図巻冊」(『宮崎県史 近世編5』に所収)に詳しい。

## 第四節 調査の概要と経過(第3図)

### 1 調査の概要

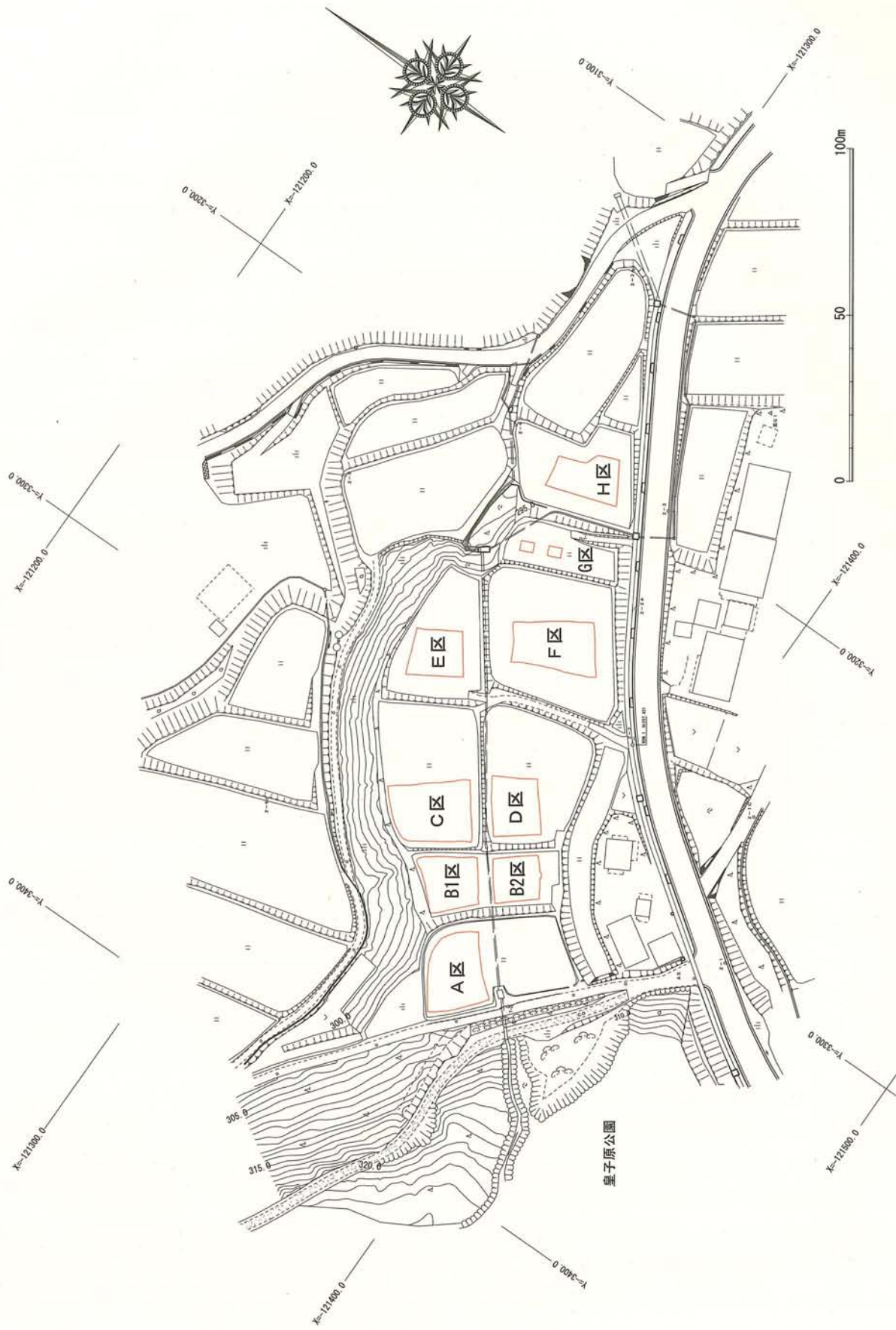
調査区は、表土の管理が難しい上に小規模な面積で田毎に高低差のある水田が主体であったため、一面の調査区とする事が出来なかった。よって、水田一枚毎に地区名を付け、各水田には

(1) まず半分を調査し、それを埋め戻した後にもう半分を調査する。

(2) 1/2~2/3のみを調査し、残りは調査しない。

という2方法を、調査期間を考慮して使い分けた。その結果、A・B1・B2・C・D・E・F・G(試掘調査のみ)・Hの9区に分けて調査を実施した。よってB区のみ(1)の方法で調査した他は全て(2)の方法で調査した。調査対象の水田のほぼ半分が終戦後の開拓によって表土が削平され、床土の下がすぐ縄文土器の包含層となっている区もあったが(C・E・H区)、一応は表土から高原スコリアまでは重機で掘削し、その後は人力で掘削した(一部重機使用)。遺構面は大きく分けて2面「高原スコリア直下面」「橙色土上面」を中心に精査したが、一部橙色土の掘削途中でも遺構の検出を行っている。

遺構は、高原スコリア直下面(ⅢA層)から、狩猟用陥し穴が、A区で2基・B1区4基・B2区2基・E区1基・F区4基・H区2基の、計15基検出された。又、高原スコリア上層で形成された溝がB2区で1基検出された。次に、その下の橙色土上面層(ⅣA層)からは畝の畝状遺構が、B2区・D区・F区・G区(遺構の確認のみ実施)・H区で検出された。



第3図 榑粉山遺跡現況地形図及び調査区割り図

構が、B2区・D区・F区・G区(遺構の確認のみ実施)・H区で検出された。

遺物については、橙色土上面層(IV A層)から御池ボラ混入層(IV D b層)にいたる幅広の包含層の中で、平安時代の土師器及び縄文時代中期から後期にかけての土器・石器が検出された。このうち、土師器の出土分布はB2・C区に集中し、器種構成は、坏・高台付椀・内黒土器・土師器甕・須恵器甕(胴部片少量)、である。又、縄文土器の出土地は、C・E・H区に集中しており、器種・型式等については現在調査中である。A・B1区では遺物は20点程しか出土しなかった。

このように、遺構・遺物共に、区毎の検出数に大きなばらつきがある。

なお、調査の最中に、様々な状態で炭化物が検出された。又、火山灰や土壌分析なども併せて実施した。その度に自然科学分析を実施していたので、その分析箇所を記しておく。

A区・・・調査区土層断面を利用したテフラ分析

B1区・・・旧第3試掘坑の壁面、赤色火山灰下の黒褐色スコリア層混入の炭化物  
同壁面における土壌分析

C区・・・御池ボラ混入土検出の炭化物

D区・・・高原スコリア直下層で検出された炭化物

F区・・・調査区壁面における土壌分析

H区・・・畠の畝状遺構横で出土した炭化木

## 2 調査の経過

以下、調査日誌をもとに、調査経過の概要を記す。

(平成11年度)

11月15日(月) 調査区にプレハブ等設置。A区表土掘削(～19日)。

11月22日(月) 作業員投入、A区高原スコリア除去(～30日)。B1区表土掘削(～24日)。

11月25日(木) C区の表土掘削(～29日)。

11月26日(金) B1区SC6検出。

11月29日(月) B1区SC3～5検出。A区SC1～2検出。D区表土掘削(～12月1日)。

12月3日(金) 県文化課の東憲章氏来現、指導を受ける。

12月7日(火) B1区SC3・4・6完掘。古環境研究所の杉山真二氏・堀口讓氏来現、D区出土の炭化物及びB1区の土壌分析を依頼。

12月9日(木) A区SC1・2完掘。

12月20日(月) 古環境研究所の早田勉氏・堀口氏来現、A区テフラ分析を依頼。

12月21日(火) SC5・6半截終了。C区より古代土師器が大量出土。

1月7日(金) SC3・4半截終了。

1月13日(木) SC1・2半截終了。

1月17日(月) A区完掘状況の空撮。

1月19日(水) 古環境研究所の堀口氏来現、B1区SC3逆茂木出土の炭化木分析を依頼。

1月26日(水) B1区完掘状況の空撮。

1月27日(木) A区埋め戻し(～31日)。D区橙色上面で畝状遺構検出。

- 2月 1日(火) B 1 区埋め戻し(～2日)。
- 2月 2日(水) B 2 区表土掘削(～4日)。
- 2月 7日(月) C 区より縄文土器が大量に出土、遺物取り上げ(～3月17日)。
- 2月 8日(火) B 2 区SC 7～8・SE 1 検出。
- 2月10日(木) B 2 区SE 1 完掘。
- 2月18日(金) D 区畝状遺構完掘。古環境研究所の堀口氏来現、B 2 区SE 1 埋土・C 区御池ボラ混入土出土の炭化物・D 区畝状遺構埋土分析を依頼。県文化財保護審議委員の三宅虎則氏来現。現場を視察。
- 2月21日(月) D 区畝状遺構の空撮。
- 2月28日(月) B 2 区SC 7～8 完掘・畝状遺構検出。
- 2月29日(火) 小林市教委嘱託(当時)の重留康宏氏来現、指導を受ける。
- 3月 1日(水) B 2 区SC 7～8 半截終了。
- 3月 8日(水) 県文化課の吉本正典氏来現、指導を受ける。
- 3月13日(月) 奈良大学教授の泉拓良氏・高岡町教委の廣田晶子氏来現、指導を受ける。宮崎日日新聞社に成果を発表(16日付新聞掲載)。
- 3月14日(火) B 2 区畝状遺構完掘。
- 3月17日(金) 古環境研究所の堀口氏来現、B 2・C・D 区の土壌分析を依頼。B 2 区畝状遺構・C 区完掘・D 区完掘状況の空撮。
- 3月20日(月) 調査区埋め戻し(～24日)。

(平成12年度)

- 9月 5日(火) E 区試掘坑設置・掘削、SC 9 検出。
- 9月 7日(木) E 区表土掘削(～8日)。F 区表土掘削(～12日)。
- 9月11日(月) F 区SC 10～13 検出。
- 9月18日(月) E 区から縄文土器が大量出土、遺物取り上げ。
- 9月19日(火) SC 9 完掘。
- 9月20日(水) 県文化課の谷口武範氏来現、指導を受ける。
- 9月22日(金) F 区SC 10～11 完掘。
- 9月26日(火) F 区SC 12～13 完掘。
- 9月28日(木) F 区畝状遺構検出。
- 10月 2日(月) E 区流路跡検出。F 区SC 11 半截終了。
- 10月11日(水) F 区SC 12～13 半截終了。
- 10月17日(火) F 区SC 10 半截終了。
- 10月23日(月) 小林市の重留氏・野尻町教委の山本謙作氏来現、指導を受ける。
- 10月30日(月) E 区SC 9 半截終了。F 区畝状遺構完掘。  
G 区試掘坑設置・掘削(～11月7日)。
- 10月31日(火) 小林市の重留氏来現、指導を受ける。
- 11月 6日(月) F 区畝状遺構の空撮。
- 11月 7日(火) E 区御池ボラ直下層での遺構検出。
- 11月 8日(水) F 区第2橙色土面の遺構検出
- 11月16日(木) H 区表土掘削(～22日)。

- 11月21日(月) H区SC15 検出。  
 11月22日(火) H区SC14 検出。  
 11月29日(水) F区第2橙色土上面の遺構完掘。県文化課谷口氏・飯田博之氏・小林市教委の重留氏来現、指導を受ける。  
 12月5日(火) H区SC14 完掘。  
 12月6日(水) 県文化課飯田氏来現、指導を受ける。  
 12月11日(月) H区畝状遺構検出。  
 12月13日(水) H区SC15 完掘、SC14 半截終了。  
 12月14日(木) 古環境研究所の堀口氏来現、F区の土壌分析・H区検出の炭化木分析を依頼。F区第2橙色土上面の遺構完掘。H区畝状遺構完掘。  
 12月15日(金) H区SC15 半截終了。E・F・H区完掘状況の空撮。  
 12月22日(水) 現場から道具を撤去。調査終了。

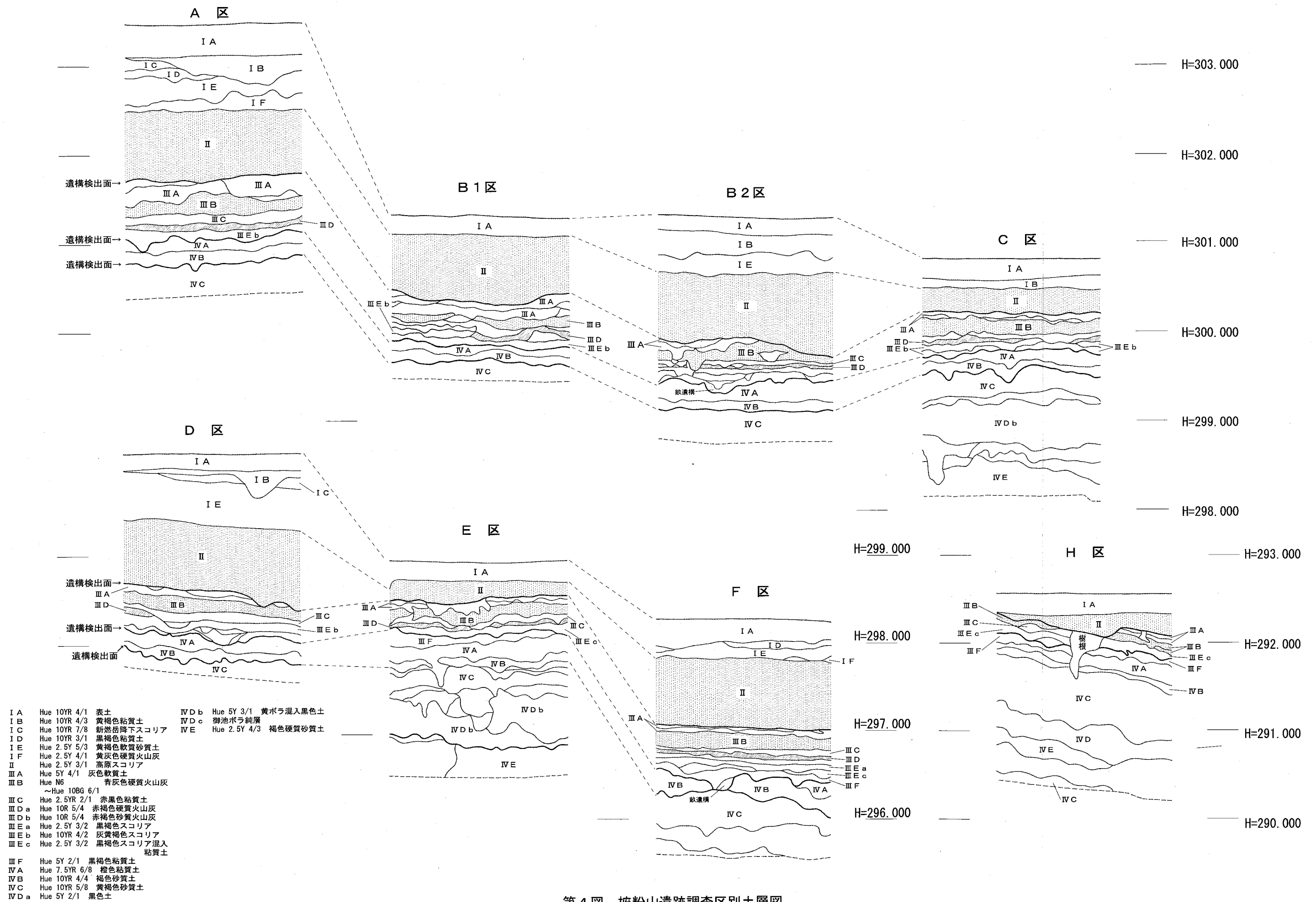
## 第5節 柿粉山遺跡の基本層序(第4図)

層序については、各地区の近年の削平状況や元々の堆積状況により異なるが、主に「表土～黒褐色スコリア」(Ⅰ層)・「黒褐色スコリア」(Ⅱ層)・「黒褐色スコリア～橙色土上面」(Ⅲ層)・「橙色土上面～御池ボラ」(Ⅳ層)層の4種に大別できる。それを踏まえて標準的な層序を説明すると、まず表土(水田の床土・ⅠA層)があり、その下は、黄褐色粘質土(ⅠB層)・黄橙色スコリア(ⅠC層)・黒褐色粘質土(ⅠD層)・黄褐色軟質砂質土(ⅠE層)・黄灰色硬質火山灰(ⅠF層)・高原スコリア(Ⅱ層)・灰色軟質土(ⅢA層)・青灰色硬質火山灰(ⅢB層)・赤黒色粘質土(ⅢC層)・赤色火山灰(ⅢD層)・黒褐色スコリア(ⅢE層)・黒褐色粘質土(ⅢF層)・橙色粘質土(ⅣA層)・褐色砂質土(ⅣB層)・黄褐色粘質土(ⅣC層)・黒色黄ボラ混入粘質土(ⅣD層)・褐色硬質砂質土(ⅣE層)、である。

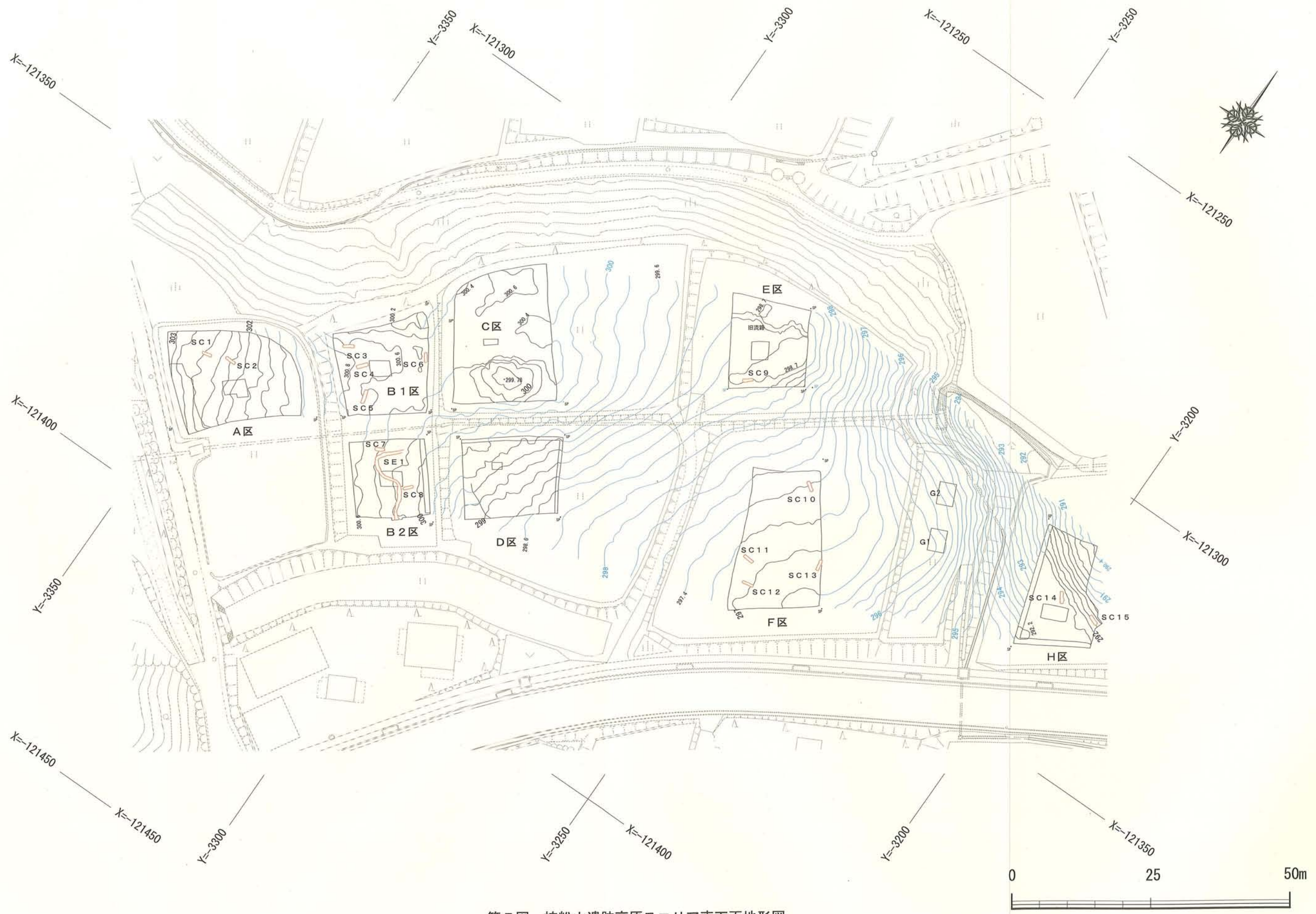
このうち、ⅠC層は、享保元年(1716)から翌2年にかけて噴火した新燃岳の火山灰と推定されている。Ⅱ層は通称「高原スコリア」と呼ばれ、「霧島大谷第(4)5・6テフラ」に相当する。高原町をはじめとして、宮崎市近辺などでも確認される鍵層である。ⅢB層は「霧島大谷第3テフラ」に相当し、青色・白色火山灰が不定ではあるが交互に重なって堆積している。ⅢD層は「霧島大谷第2テフラ」に相当し、硬質化した火山灰(ⅢD a層)と砂質の火山灰(ⅢD b層)の2種ある。ⅢE層は「霧島大谷第1テフラ」に相当し、場所によって黒褐色スコリア(ⅢE a層)・灰黄褐色スコリア(ⅢE b層)・黒褐色スコリア混入粘質土(ⅢE a層とⅢF層の混層)の3種に分かれる。ⅣB層は火山灰と思われるが、層として連続せずブロック状に残存する。ⅣD層は上から黒色土(ⅣD a層)、黄ボラ混入土(ⅣD b層)、御池ボラ純層(ⅣD c層)に分層できる。

この土層の中で、遺構については、狩猟用陥し穴はⅢA層上面で、畠の畝状遺構はⅣA層上面で、時期不明のピット及び土坑はⅣC層及びⅣE層上面でそれぞれ検出された。又、遺物については、ⅣA層からⅣD b層にかけて出土する。古代の土師器については、ⅣA層を中心に出土する。縄文土器は、ⅣA層からⅣD b層にかけて広い範囲で出土する。









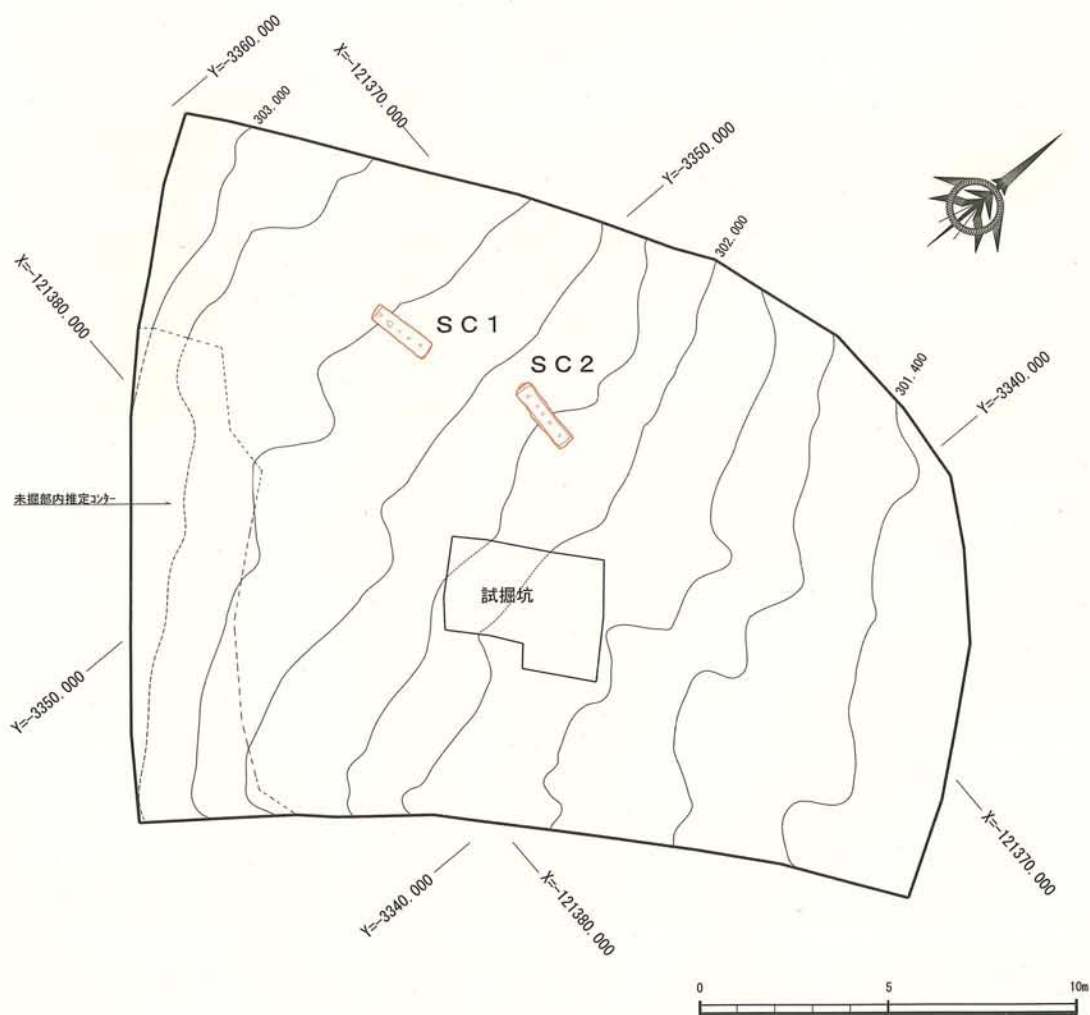
第5図 榑粉山遺跡高原スコリア直下面地形図

## 第Ⅱ章 高原スコリア直下面での遺構・遺物

### 第1節 はじめに(第5図)

今回の調査では、これまで高原町で行われた発掘調査方法を踏襲して、表土から高原スコリアの半ばまでの約150cmを重機で掘削し、残りのスコリア及び精査を人力で行った。重機を使用して遺構面の間際まで掘削したのは、当町の霧島山に近い箇所では高原スコリアが1m近く堆積しているため、時間短縮及び作業能率を考慮したためである。よって、高原スコリアより上の層位、いわゆる「新燃享保噴火火山灰」の周辺などは調査せず、土壌分析に留めている。

調査の結果、高原スコリアの直下面において、狩猟用と思われる陥し穴(SC)が計15基、高原スコリアの上層から形成された溝(SE)が1基検出された。遺物については、E区SC9のみ遺構壁面より出土しているが、直接遺構に関するような遺物は出土していない。以下、その成果を記す。



第6図 榊粉山遺跡A区高原スコリア直下面地形図



## 第2節 各区の出土遺構(第6～28図)

### 1 A区の出土遺構(第6図)

A区は、東側に流れる緩斜面で、等高線に直交する状態で狩猟用と思われる陥し穴遺構が2基(SC1・2)検出された。2基とも同方向直列に並んでいる。埋土については、SC1・2共通して、上部は砂粒を多量に含んだ粘質土、下部は高原スコリアの2層から成る。

#### SC1(第7図)

中心部分よりやや西側で検出された。軸方向はN83.3°Eである。埋土からは炭化物は検出されなかった。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で179.0cm・下端は168.0cm、短軸は上端で49.5cm・下端で49.0cmと、長軸側が台形状を成すのに対し、短軸側は、壁がほぼ直立した状態である。底はほぼ水平であるが、掘り方の高低差により東西側で深さが65～78cmと変化する。底からは逆茂木が5本検出された。ほぼ長軸方向に沿い、35～40cmとほぼ等間隔に配置されている。形状は先の尖った三角錐形で、径は8～16cm、深さは30～43cmである。中心部には高原スコリアが詰まっており、逆茂木の縁辺部に張り付くように炭化木が検出された。逆茂木には中空の材質が使用されたと思われる。

#### SC2(第8図)

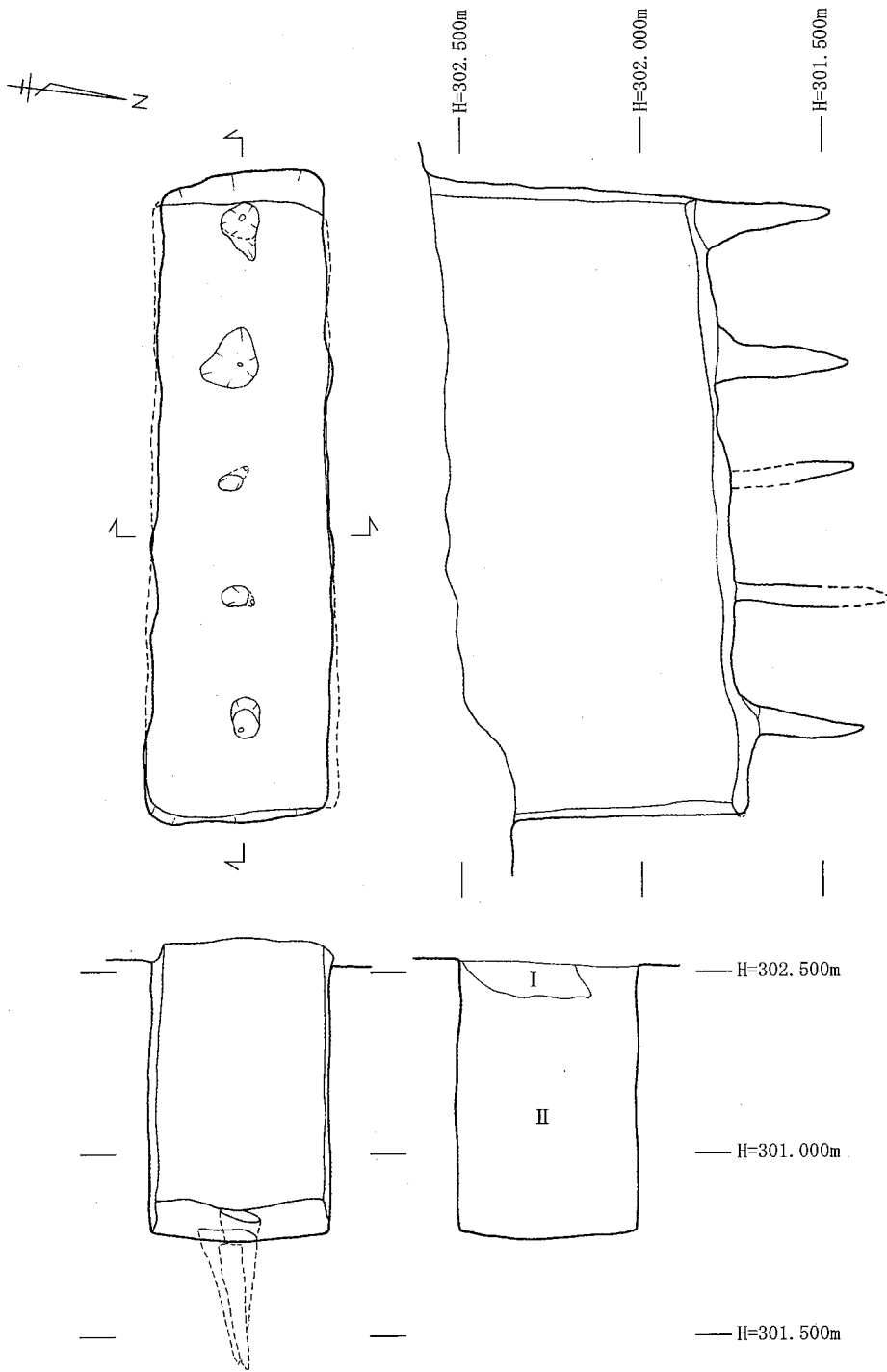
SC1の東側で検出された。軸方向はN100.5°Eである。埋土はSC1と同様に砂粒混入の粘質土と高原スコリアの2層で、炭化物は検出されなかった。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で198.0cm・下端で176.5cm、短軸は上端で53.0cm・下端で38.5cmと、長短軸共に底の方がやや狭くなる。底はほぼ水平で、深さは80.0cmである。底からは逆茂木が5本検出された。長軸方向に沿い、25～46cmと配置の間隔にばらつきがある。形状は先の尖った三角錐形で、径は5～8cm、深さは34～42cmである。中心部には高原スコリアが詰まっており、逆茂木の縁辺部に張り付くように炭化木が検出された。逆茂木には中空の材質が使用されたと思われる。

### 2 B区の調査成果(第9図)

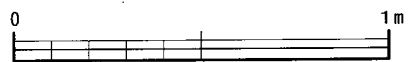
B1区は、A区から続かない状態の平坦地となっているのに対し、B2区はA区から続く緩斜面となっている。B1区からは、配置に規則性が見られない状態で陥し穴遺構が4基(SC3～6)、B2区では等高線に直交する形で2基(SC7・8)検出された。又、B2区では、高原スコリアの上部から形成された自然流路らしき痕跡(SE1)も検出された。埋土については、B1区のSC3～6は高原スコリアのみで形成されるのに対し、B2区のSC7・8は、高原スコリアは遺構上部にのみ堆積し、下部は黒褐色土に青灰色火山灰や橙色土のブロックが混入している。

#### SC3(第10図)

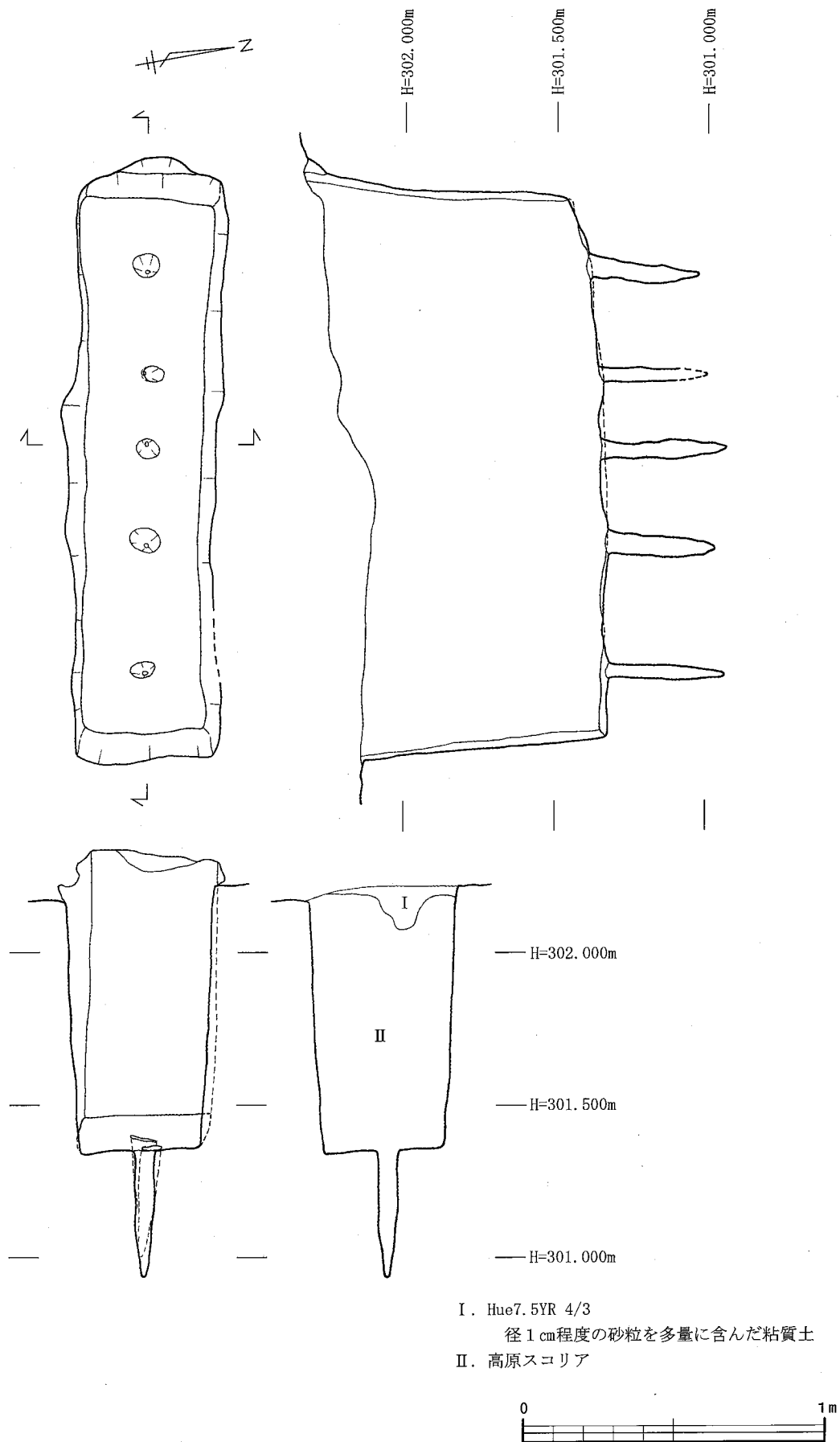
B1区の北西側で検出された。軸方向はN63.5°Eである。埋土は高原スコリアのみで、



I. Hue7.5YR 4/3  
 径1cm程度の砂粒を多量に含んだ粘質土  
 II. 高原スコリア



第7図 柵粉山遺跡A区SC1実測図



第8図 榑粉山遺跡A区SC2実測図

炭化物は検出されなかった。ただ、埋土中で逆茂木があったと思われる箇所は空洞になっていた。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で207.0cm・下端で199.0cm、短軸は上端で56.5cm・下端で39.0cmと、長短軸共にやや底のプランが狭くなる。深さは中心部分でやや深くなり、46～52cmである。底からは逆茂木が4本検出された。長軸方向に沿い、約40cmの等間隔で配置されている。形状は先の尖った三角錐形で、径は4本のうち3本が8cm前後と一定であるが1本のみ16cmと大きい。深さは48～51cmとあまりばらつきがない。

#### SC4 (第11図)

SC3の南東側で検出された。軸方向はN43.3° Eである。埋土は高原スコリアのみで、炭化物は検出されなかった。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で221.4cm・下端で166.5cm、短軸は65.0cm・下端で37.0cmと、長短軸共に底の方が狭めとなる。深さは中心部分で深くなり、87～95cmである。底からは逆茂木が9本検出された。数本の例外があるものの、およそ長軸に沿って配置されている。間隔は、南側では約30cm前後と一定しているが、北側のみ間隔が安定しない。逆茂木の形成された時期が異なる事に起因するものと思われる。形状は先の尖った三角錐形で大小2種あり、径は大6本が5～6cm、小3本が3～4cm、深さは24～37cmで、径の大小により差は見られなかった。

#### SC5 (第12図)

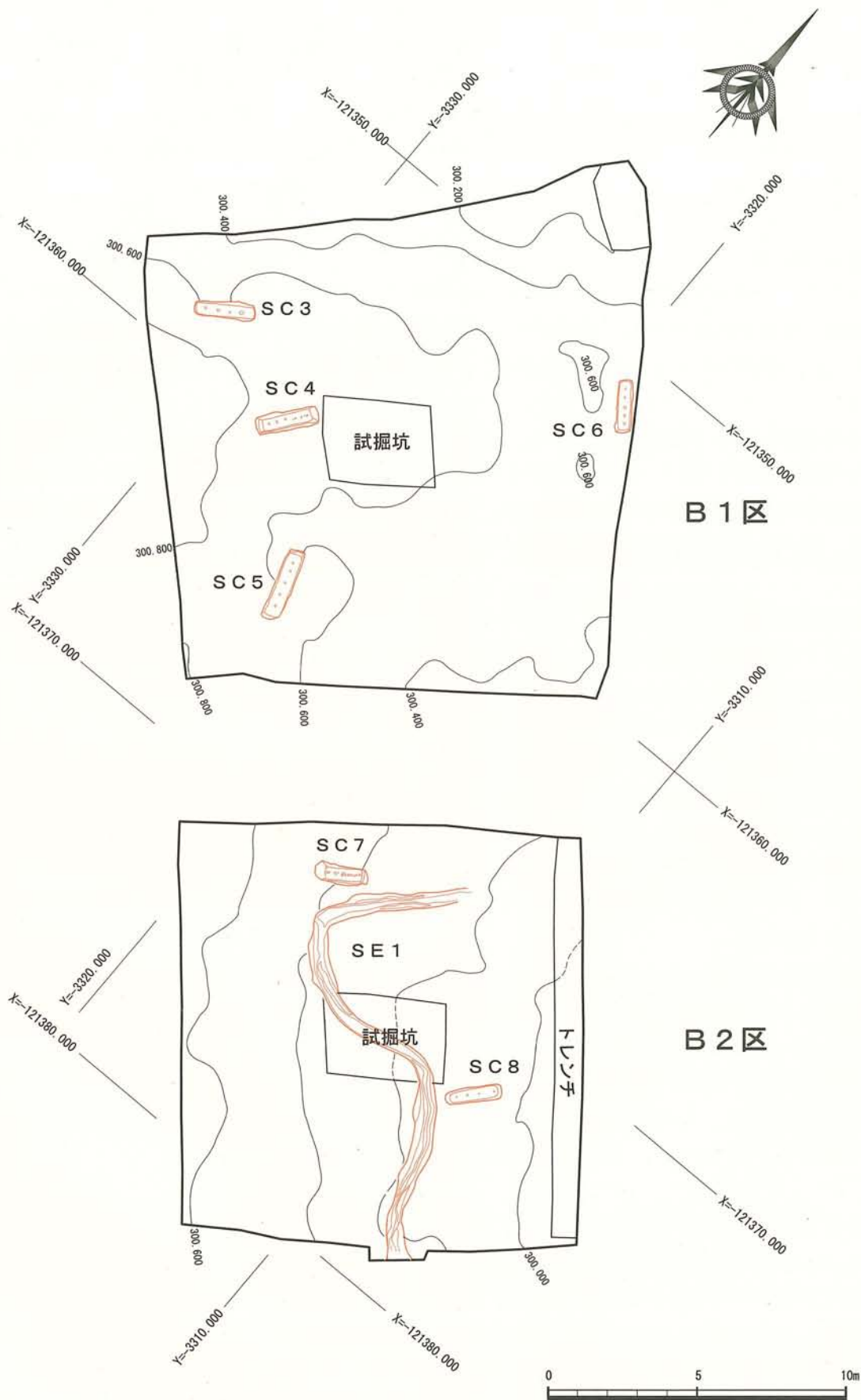
SC5の南東側で検出された。軸方向はN10.5° Wである。埋土は高原スコリアのみで、炭化物は検出されなかった。又、埋土の半ばから底に向かって逆茂木の痕跡と見られる穴が見られた。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で251.8cm・下端で236.5cm、短軸は上端で64.0cm・49.3cmと、長短軸共に底の方がやや狭めとなる。深さは中心部分で少し深くなる程度で、46～52cmである。底からは逆茂木が5本検出された。ほぼ長軸に沿って配置され、42～43cmと等間隔だが、北側の1本のみ25cmと他の逆茂木に寄っている。形状は先の尖った三角錐形で、径は6～7cmと一定で、深さは36～47cmである。

#### SC6 (第13図)

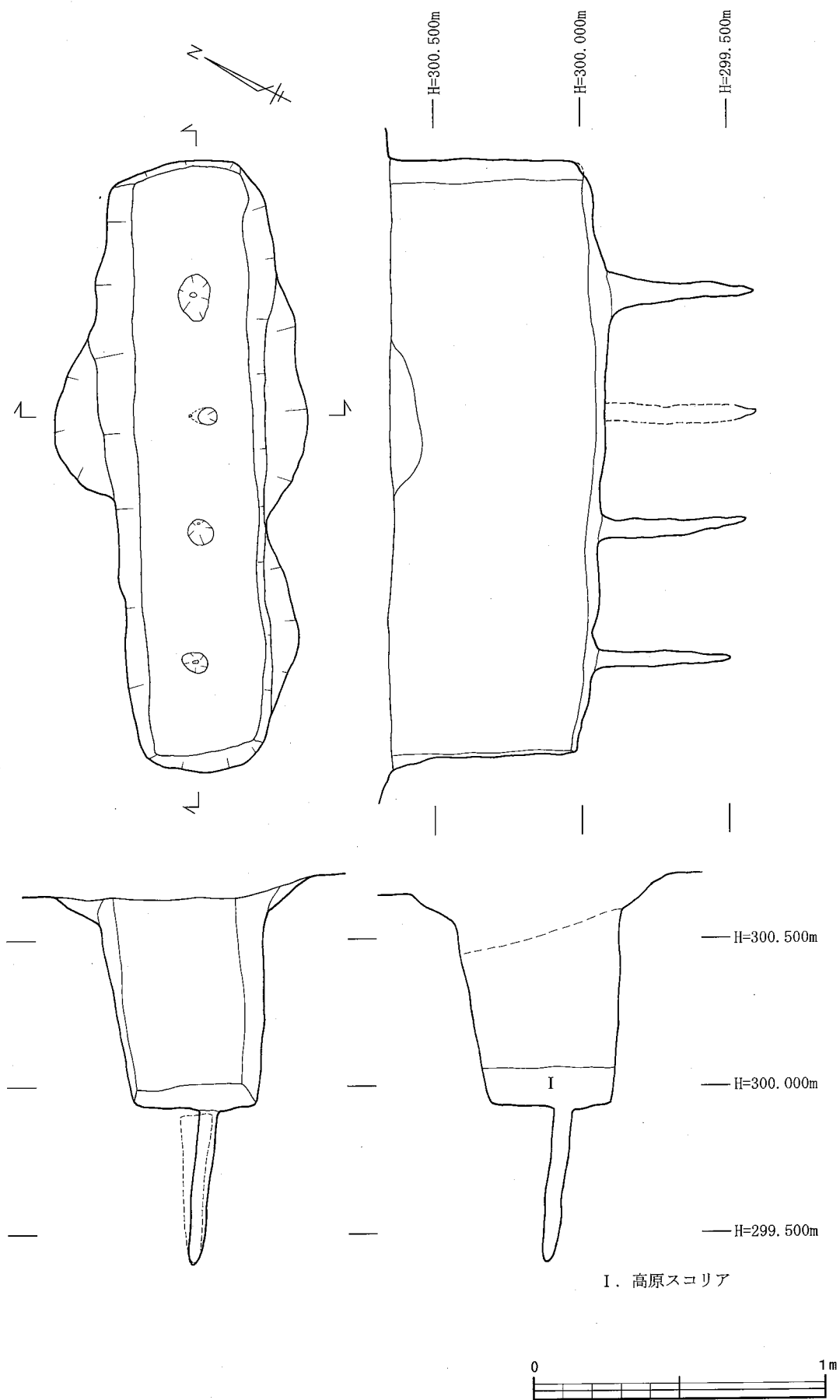
調査区の北東側、土層断面に並行する形で検出された。軸方向はN31° Wである。埋土は高原スコリアのみで、炭化物は検出されなかった。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で178.2cm・下端で165.8cm、短軸は上端で51.2cm・下端で41.0cmと、長短軸共にやや底のプランが狭くなる。深さは中心部分がやや深くなり、36～37cmである。底からは、逆茂木が5本検出された。長軸方向に沿い、28～30cmの等間隔で配置されている。形状は先の尖った三角錐形で、径は6～9cm、深さは56～59cmとまちまちである。

#### SC7 (第14図)

B2区の北西側で検出された。軸方向はN56° Eである。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で173.0cm・下端で123.0cm、短軸は上端で61.0cm・下端で39.5cm、南西側のみ傾斜が緩く、長短軸共に底のプランが狭くなる。深さは南西側がやや深めで、71～73cmである。底からは逆茂木が13本検出された。長軸方向から少し左右するような状態で配置されて、形状は先の尖った三角錐形で、長軸に沿っている5本は径7cmで深さ35cm、その他の8本は径5～8cmで深さ23～39cmである。

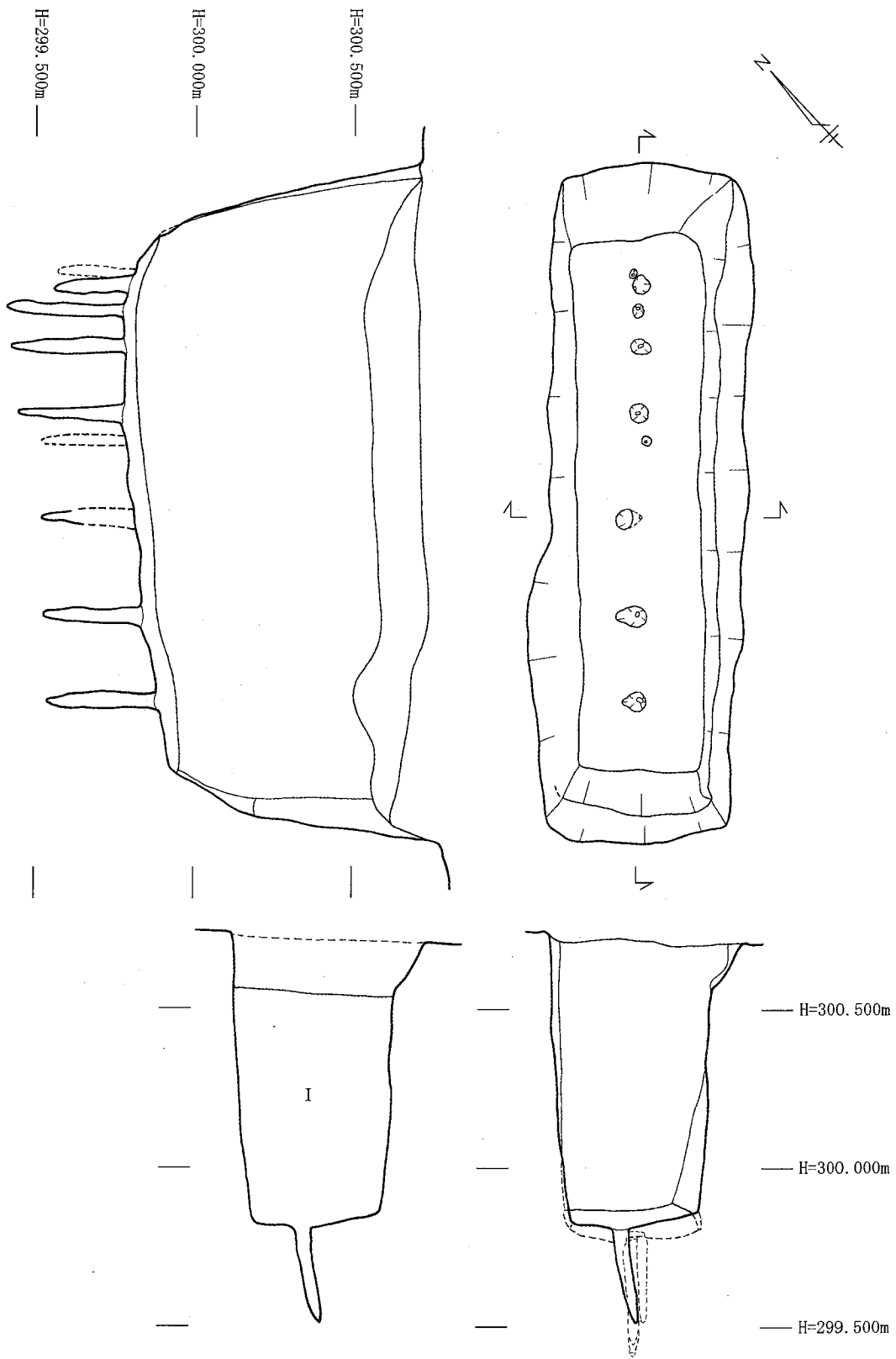


第9図 榑粉山遺跡B区高原スコリア直下面地形図



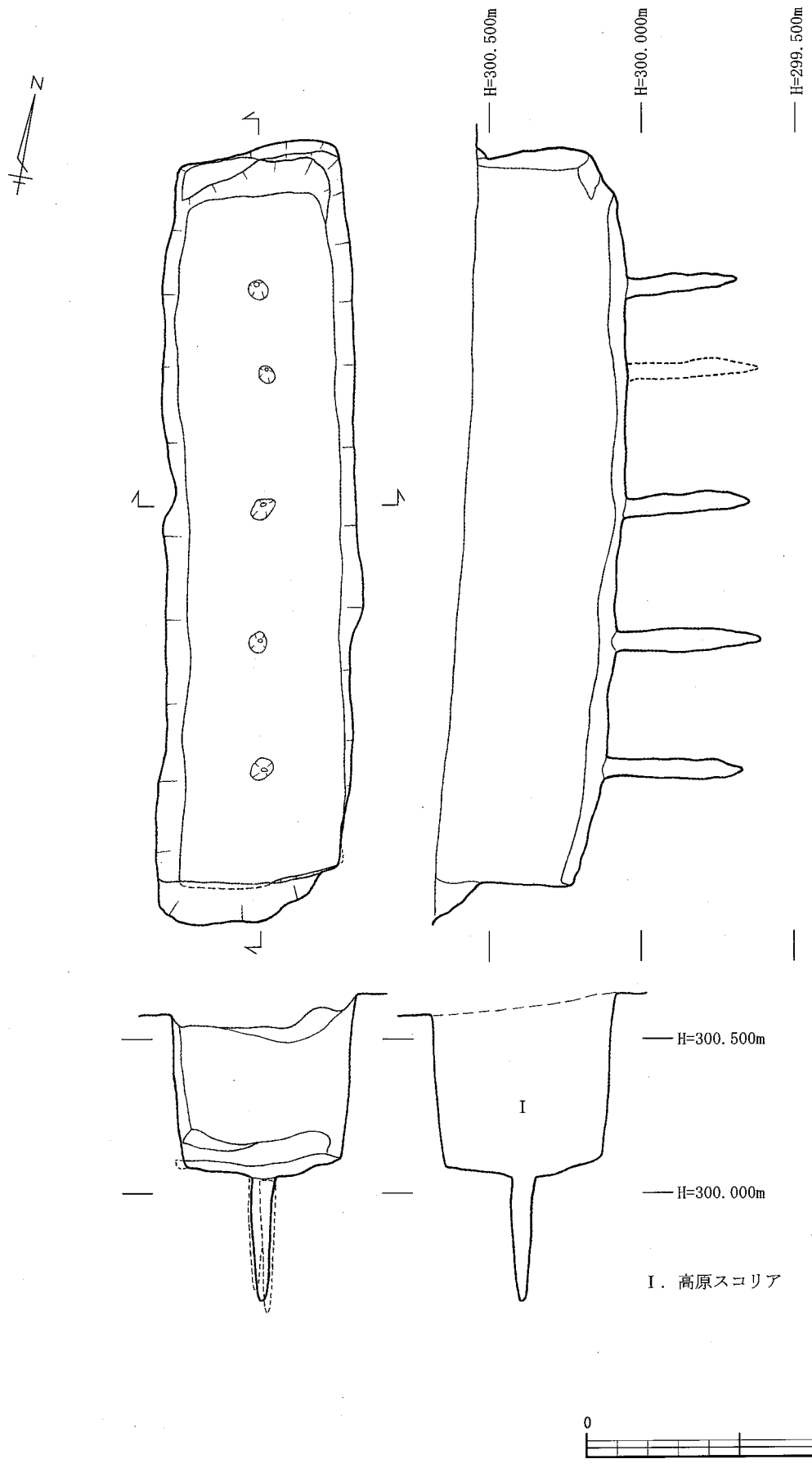
第10図 柵粉山遺跡B1区SC3実測図



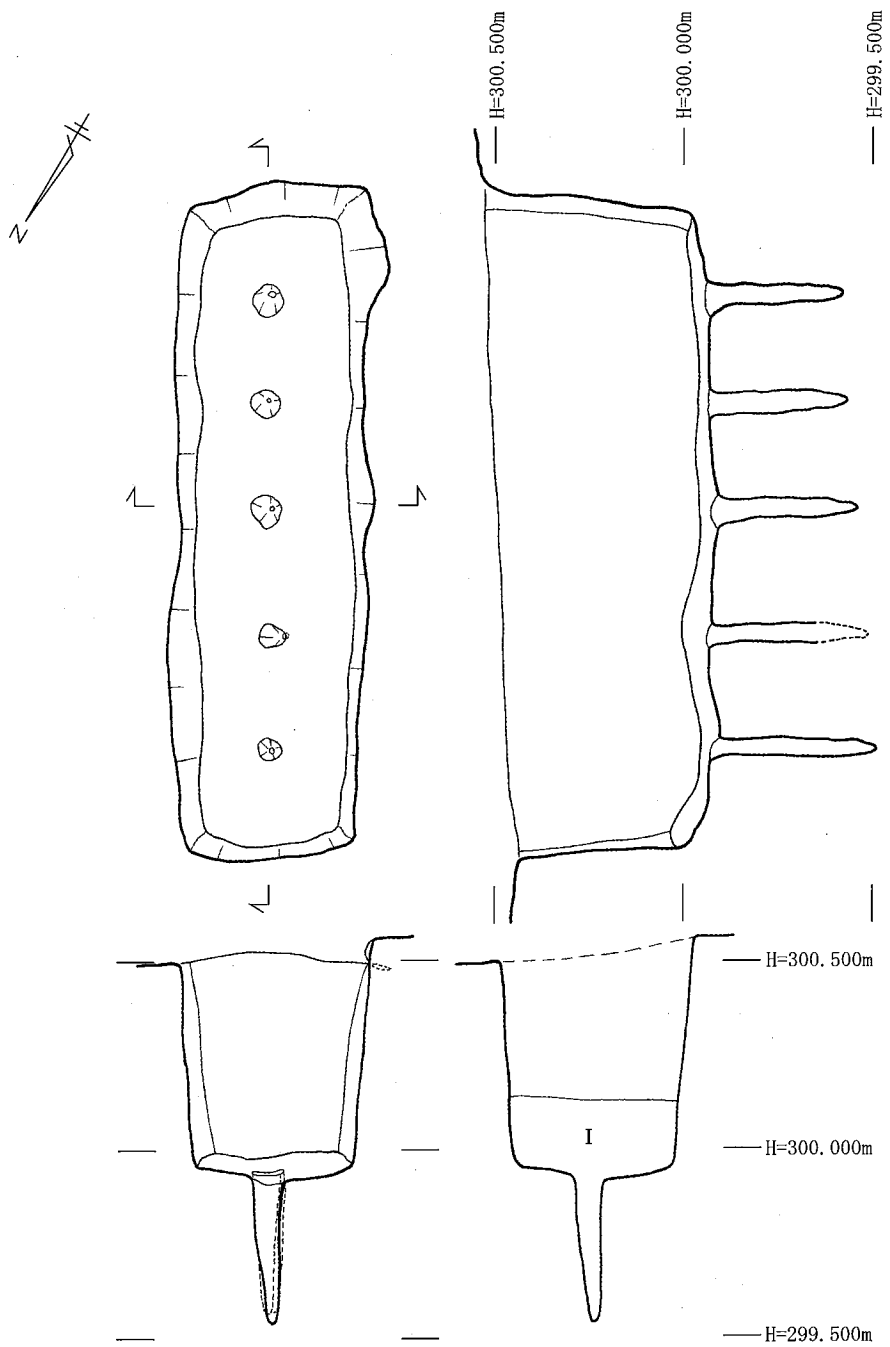


I. 高原スコリア

第11図 榑粉山遺跡B1区SC4実測図

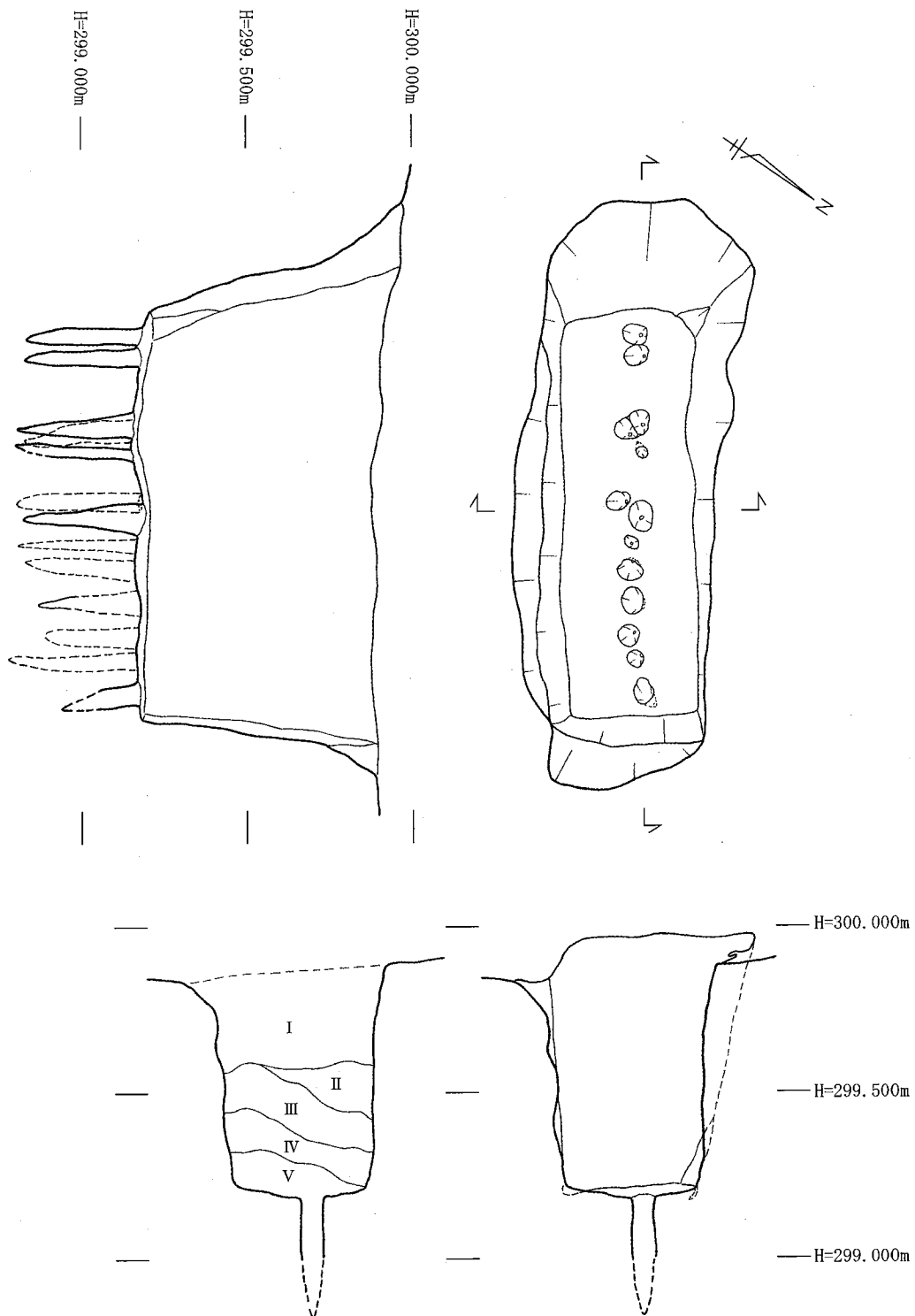


第12図 榊粉山遺跡B1区SC5実測図



I. 高原スコリア

第13図 榑粉山遺跡B1区SC6実測図

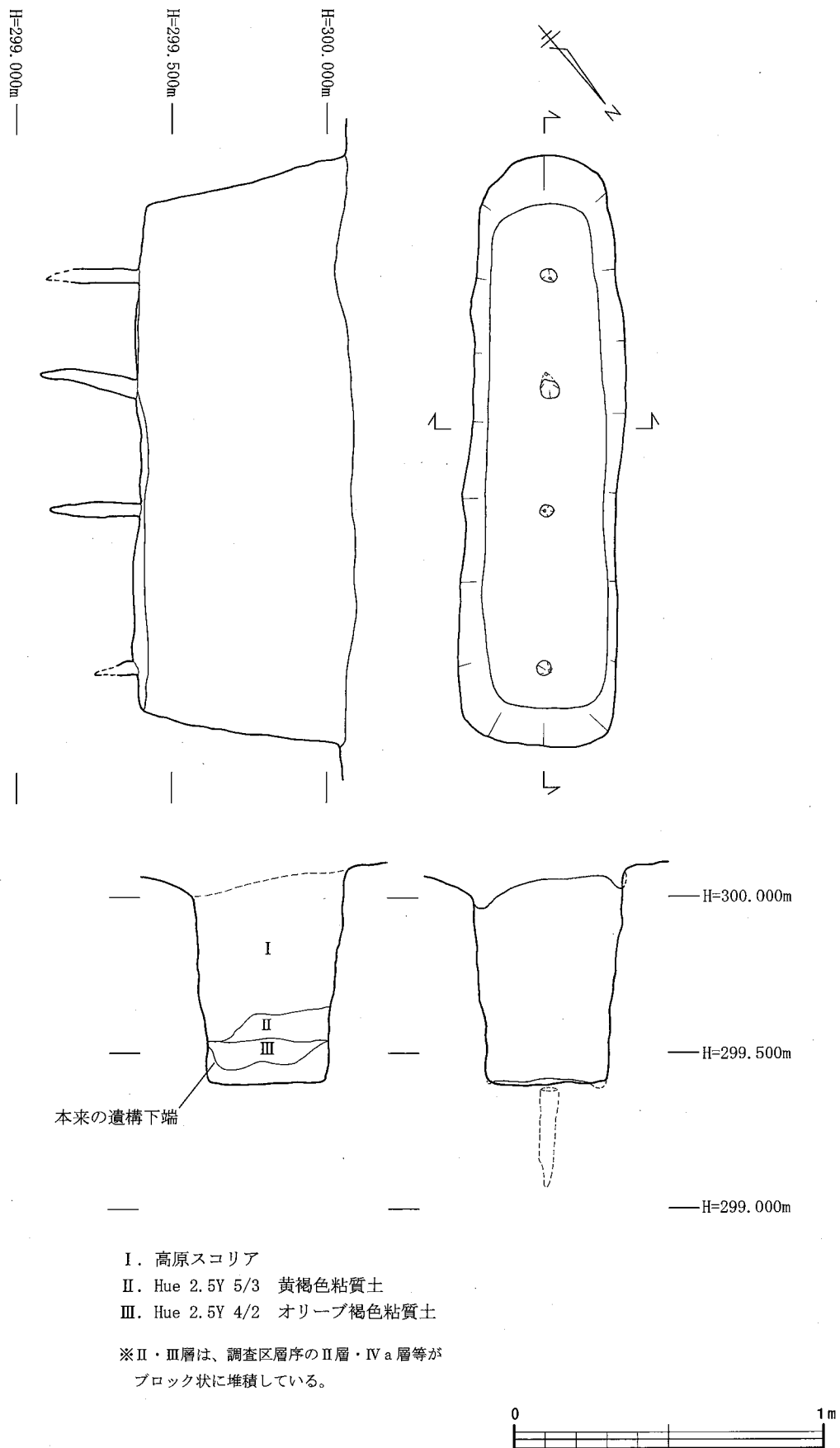


- I. 高原スコリア
- II. Hue2.5Y 4/3 黒褐色粘質土
- III. 10BG 4/1 暗青灰火山灰
- IV. N 3/0 暗灰色粘質土
- V. N 4/0 灰色粘質土

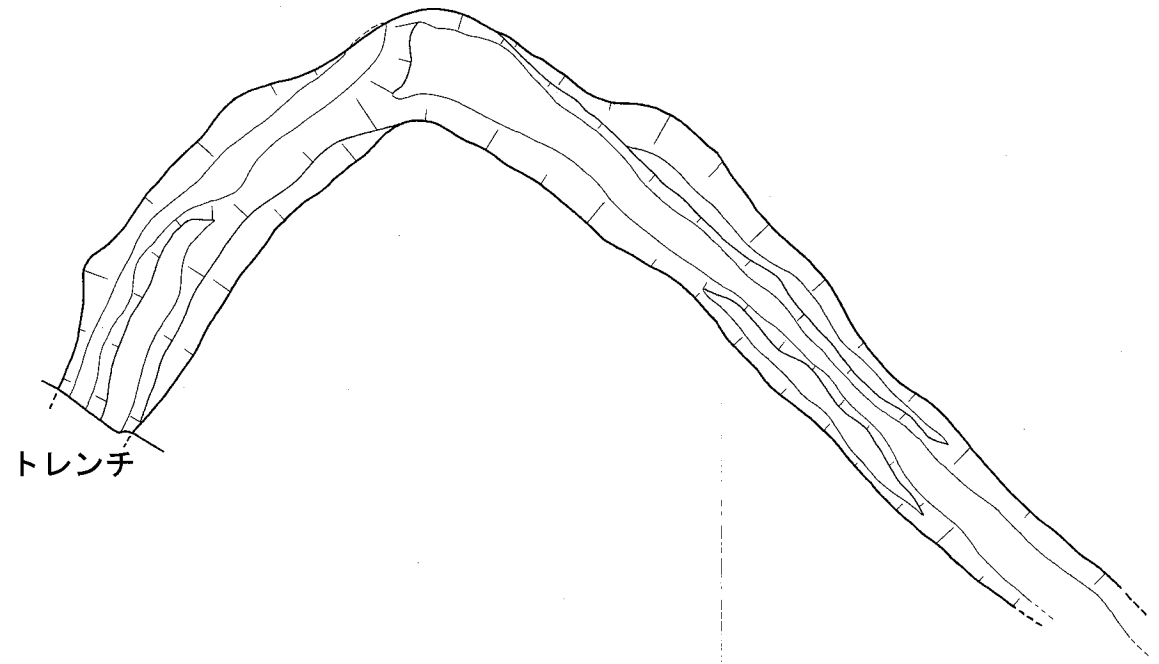
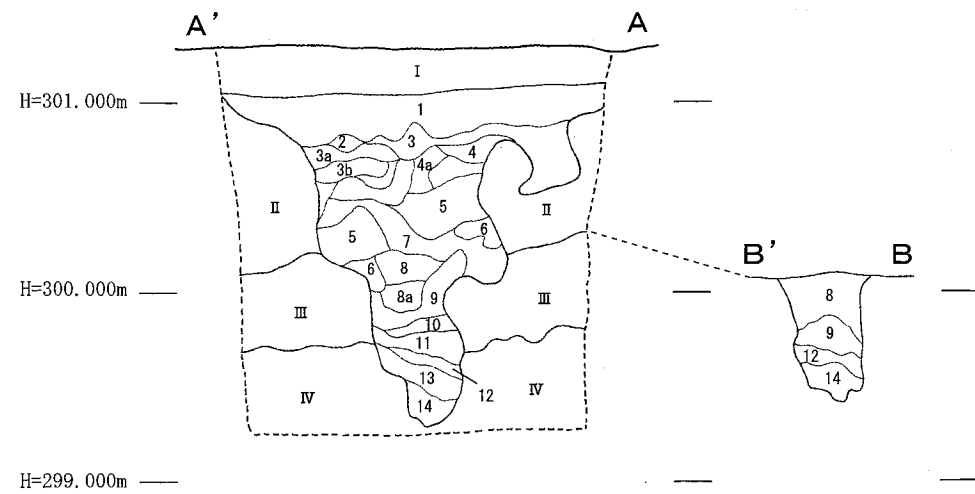
※II～V層は調査区層序のIII B層・IV a層等の  
 土壌がブロック状に堆積しており、明確な分  
 層は困難であった。



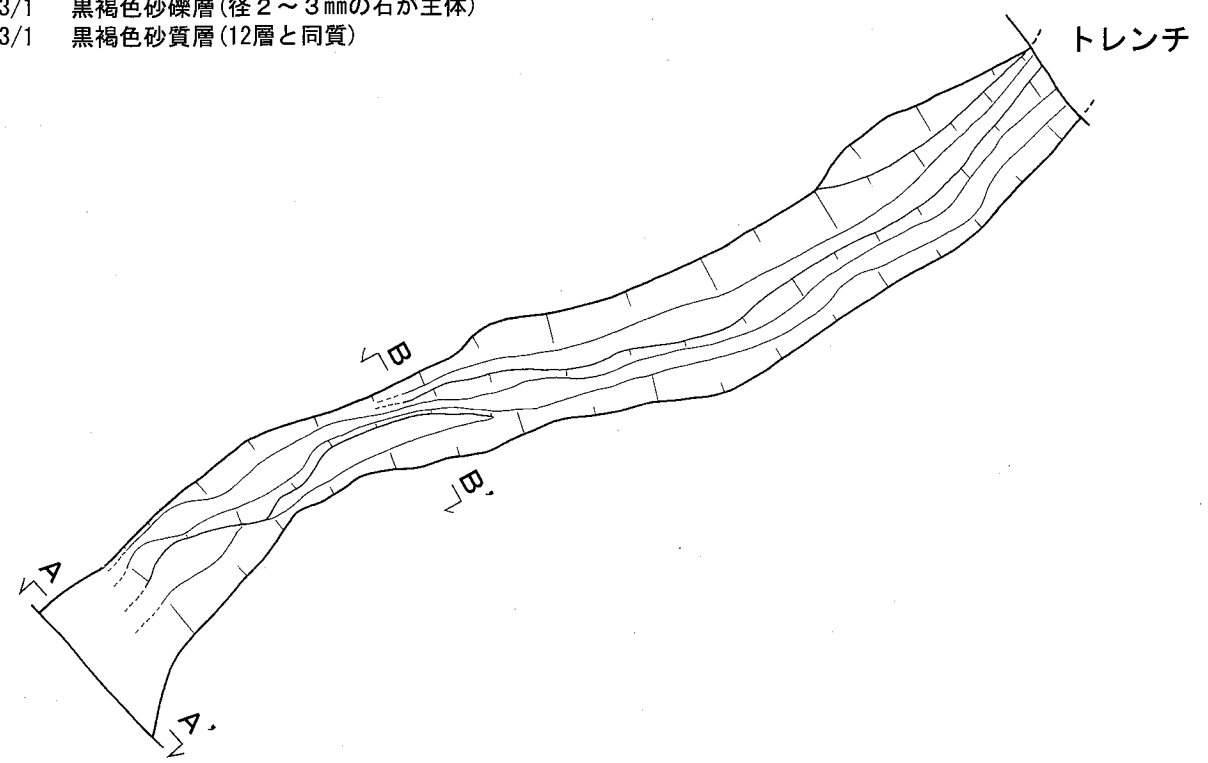
第14図 榊粉山遺跡B2区SC7実測図



第15図 榑粉山遺跡B2区SC8実測図



- 1. Hue10YR 4/2 灰黄褐色砂粒混入土
- 2. Hue10YR 3/1 黒褐色粘質土(有機物が混入・3 b層と同質)
- 3. Hue7.5YR 3/3 暗褐色砂礫混入シルト層
- 3a. Hue7.5YR 3/4 暗褐色砂礫混入粘質土(砂礫混入率が高い)
- 3b. Hue7.5YR 3/2 黒褐色粘質土(有機物が混入)
- 4. Hue7.5YR 4/1 褐灰色砂礫混入シルト層(有機質状のものが混入)
- 4a. Hue7.5YR 4/1 褐灰色砂礫混入シルト層
- 5. Hue10YR 4/1 褐灰色砂礫混入シルト層
- 6. Hue10YR 3/3 暗褐色粘質土(有機物状のものが混入)
- 7. Hue10YR 4/2 灰黄褐色粘質土(下層より粘性が強い)
- 8. Hue10YR 4/1 褐灰色砂礫混入シルト層
- 8a. Hue10YR 4/1 褐灰色砂礫混入シルト層(8 a層と同質)
- 9. Hue10YR 5/1 褐灰色微細砂混入粘質土
- 10. Hue10YR 5/1 褐灰色シルト層(11層を主体として13層の大きな砂礫が混入)
- 11. Hue2.5Y 4/1 黄灰色砂礫混入シルト層(13層の砂礫が少量混入)
- 12. Hue2.5Y 3/1 黒褐色砂質層(14層と同質)
- 13. Hue2.5Y 3/1 黒褐色砂礫層(径2~3mmの石が主体)
- 14. Hue2.5Y 3/1 黒褐色砂質層(12層と同質)



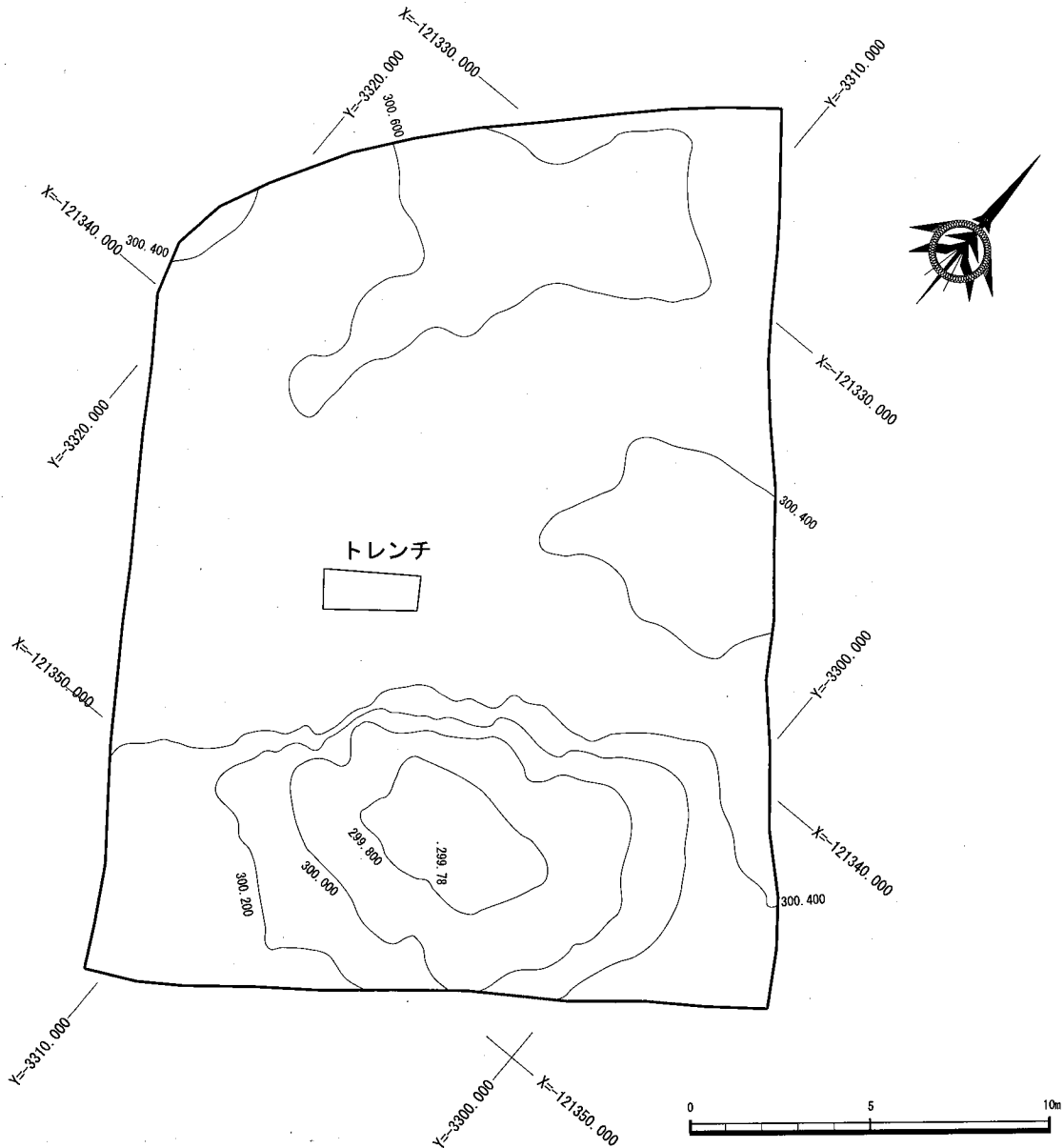
第16図 榊粉山遺跡B2区SE1実測図

**SC8 (第15図)**

同じくB2区の西側で検出された。軸方向はN40.8° Eである。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で189.0cm・下端で161.0cm、短軸は上端で49.0cm・下端で39.0cmと、長短軸共に底のプランがやや狭い。底からは逆茂木が4本検出された。長軸方向に沿い、間隔が38cm・50cmと、北東部の逆茂木のみ間隔が広がっている。形状は先の尖った三角錐形で、径4~6cm、深さ14cm・29~31cmと、間隔の広い北東部の逆茂木のみ浅い。

**SE1 (第16図)**

B2区を南東から北西に向かって蛇行している状態で検出された。北東隅から始まり、東南に向かって蛇行しながら向かっていると推測される。溝の上端は高原スコリア上部に形成されており、埋土は全体的に湿り気を帯びた粘土質が大半である。底部は極端な葉研型になっている事や、造成の痕跡が見られない事から自然流路と思われる。



第17図 榑粉山遺跡C区高原スコリア直下面地形図

### 3 C区の調査成果(第17図)

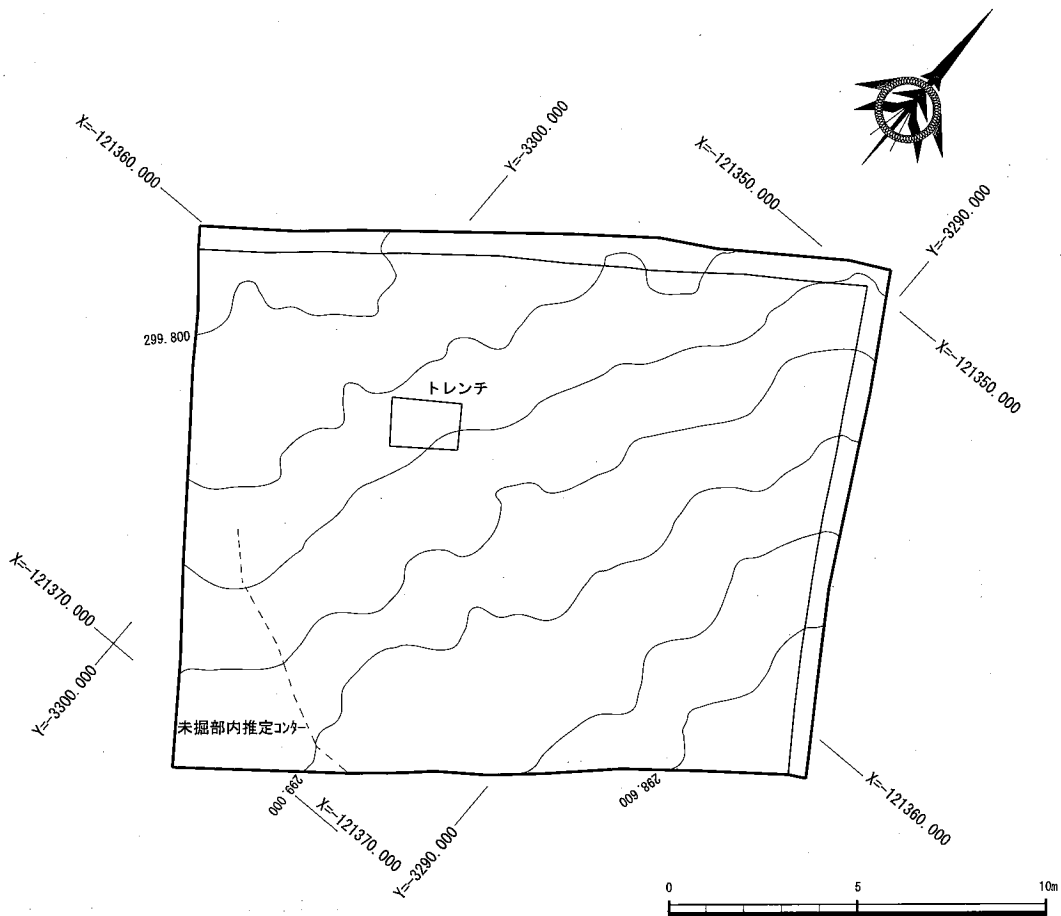
C区では、東南側が窪んでおり、当初は自然池の跡と推定していたが、窪みの斜面にキャタピラ痕(押しブル痕)があったため、表土と共に削平を受けた結果、前述の状態になったと思われる、すでに下層の遺物包含層が露出していた。遺構は検出されなかった。

### 4 D区の調査成果(第18図)

D区は、A・B2区よりもややきつく東南側へ下る緩斜面となっている。遺構は検出されなかったが、樹根の痕跡と思われる隆起が調査区一面にあり、その中に炭化物が若干見られたので、自然科学分析を実施した。

### 5 E区の調査成果(第19図)

E区においても、C区と同様、調査区の殆どが削平を受けており、高原スコリア面は水路側に残存しているのみであった。調査区南端の土層断面に沿った状態で陥し穴が1基(S C 9)



第18図 榎粉山遺跡D区高原スコリア直下面地形図

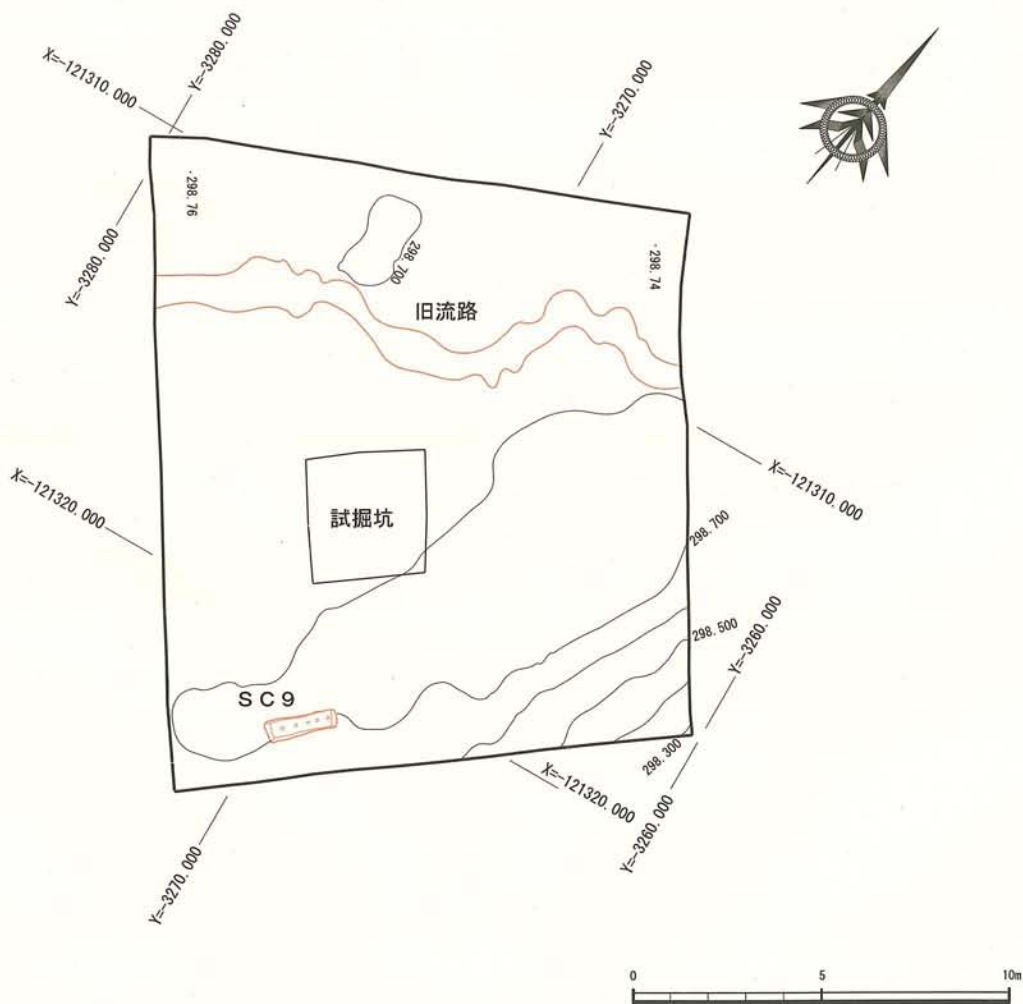


検出された。

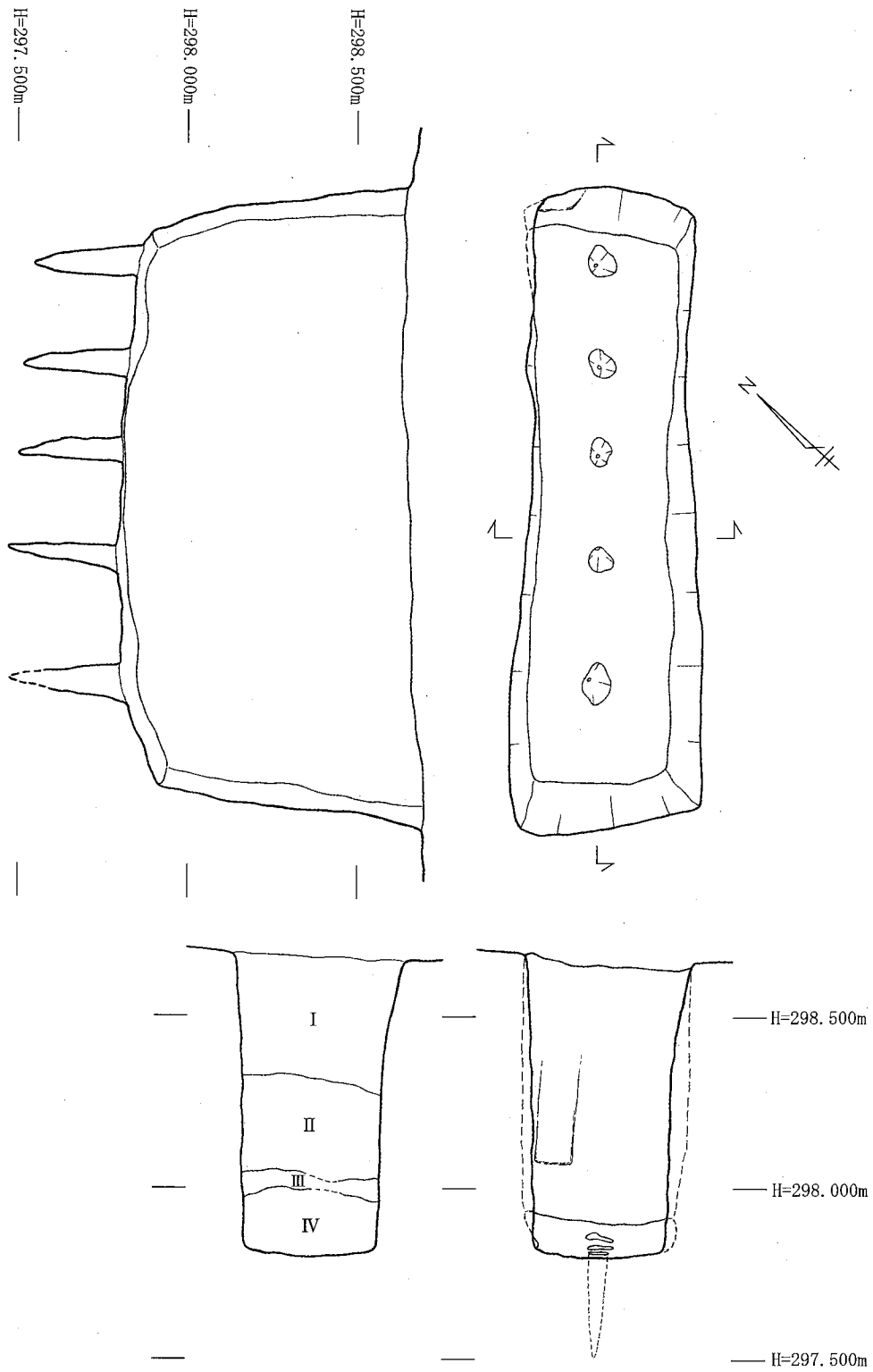
### SC9 (第20図)

調査区の南東側、土層断面に沿う形で検出された。軸方向はN47° Eである。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で188.0cm・下端で161.0cm、短軸は上端で50.0cm・下端で37.3cmと、長短軸共に底のプランがやや狭い。深さは中心部がやや深く、78~87cmである。底からは逆茂木が5本検出された。ほぼ長軸方向に沿い、25~35cmの間隔で配置されている。形状は先の尖った三角錐形で、径7~11cm、深さは30~32cmである。又、北側壁で形成の際に出来た工具痕が見られた。上から下に刻まれ、方頭で幅10.6cm、手斧と推定される。

なお、壁面より遺物が検出されたが、SC9が包含層上に作られているため、包含層に含まれている遺物が露出したものと思われる。



第19図 榑粉山遺跡E区高原スコリア直下面地形図



- I. 高原スコリア
- II. Hue 2.5Y 3/1  
高原スコリア混入黒褐色粘質土
- III. Hue 2.5Y 4/3  
褐色粘質土
- IV. Hue 2.5Y 2/1  
スコリア混入黒色土



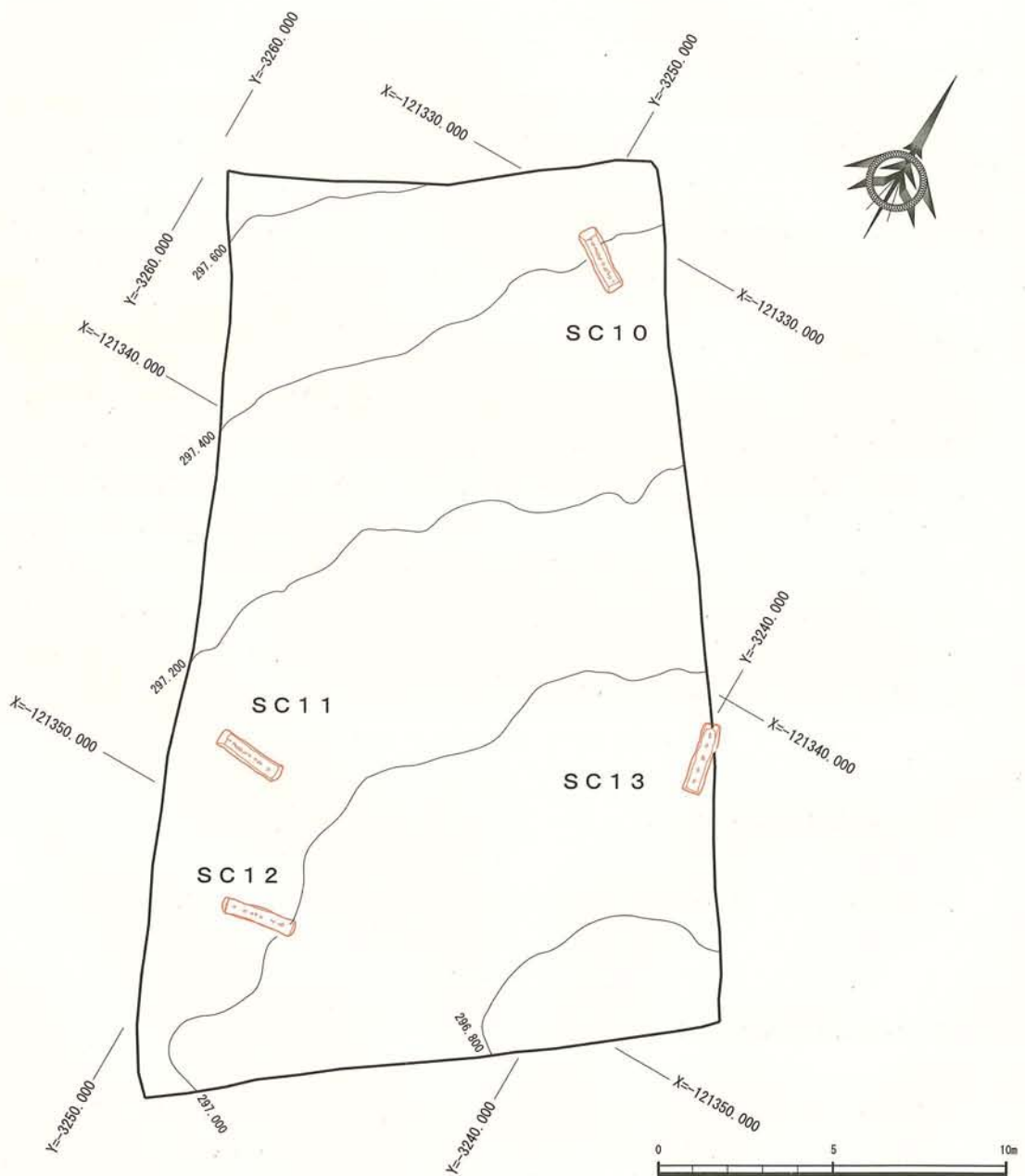
第20図 榑粉山遺跡E区SC9実測図

## 6 F区の調査成果(第21図)

F区は、東南東に流れる斜度度の緩斜面で、等高線に直交するように陥し穴が4基(SC10～13)検出された。うち2基(SC10・11)は調査区西南隅に固まり、もう2基(SC12・13)は調査区東側の隅の方に検出された。

### SC10(第22図)

調査区の北隅で検出された。軸方向はN57.3°Wである。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で186.6cm・下端で143.8cm、短軸は上端で52.0cm・下端で34.0cmと、長短軸共に底のプランがやや狭い。深さは中心部がやや深めで、87～95cmである。底からは逆茂木が16本検出された。形状は先の尖った三角錐形で、径は大(7～8cm)・中(4～5cm)・小(2～3cm)3種



第21図 榑粉山遺跡F区高原スコリア直下面地形図

類あり、内訳は大5本・中6本・小5本である。大きな逆茂木は20～35cm間隔で配置され、その隙間を埋めるように中・小の逆茂木が配置されている。深さについてはあまり径に左右されず、3種類(11～15cm・22～27cm・31～39cm)ある。

#### SC11(第23図)

調査区南側で検出された。軸方向はN86°Wである。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で201.5cm・下端で165.4cm、短軸は上端で51.0cm・下端で34.6cmと、長短軸共に底のプランがやや狭い。深さは中心部がやや深めで、77～86cmである。底からは逆茂木が13本検出された。形状は先の尖った三角錐形で、径は大(4～5cm)・小(7～8cm)2種類あり、内訳は大6本・小7本である。配置は長軸に沿ってまばらであるが、西側の逆茂木は径が小さいものが多い。深さは、径の小さい西側のみ39～44cmと深いが、その他は大体28～31cmとほぼ一定である。

#### SC12(第24図)

SC11の東南側で検出された。軸方向はN80°Eである。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で214.0cm・下端で197.0cm、短軸は上端で47.0cm・下端で39.0cmと、長短軸共に底のプランがやや狭い。深さは中心部で深く、86～96cmである。底からは逆茂木が11本検出された。西側の2本のみ離れているが、その他はほぼ2本一組になっている。形状は先の尖った三角錐形で、径は4～8cm、深さは24～27cm・34～36cm・40～41cmの3種類ある。

#### SC13(第25図)

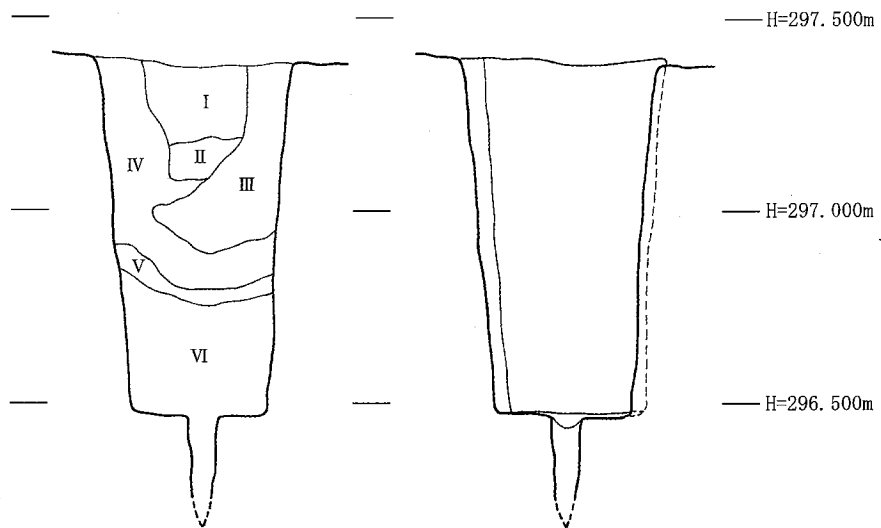
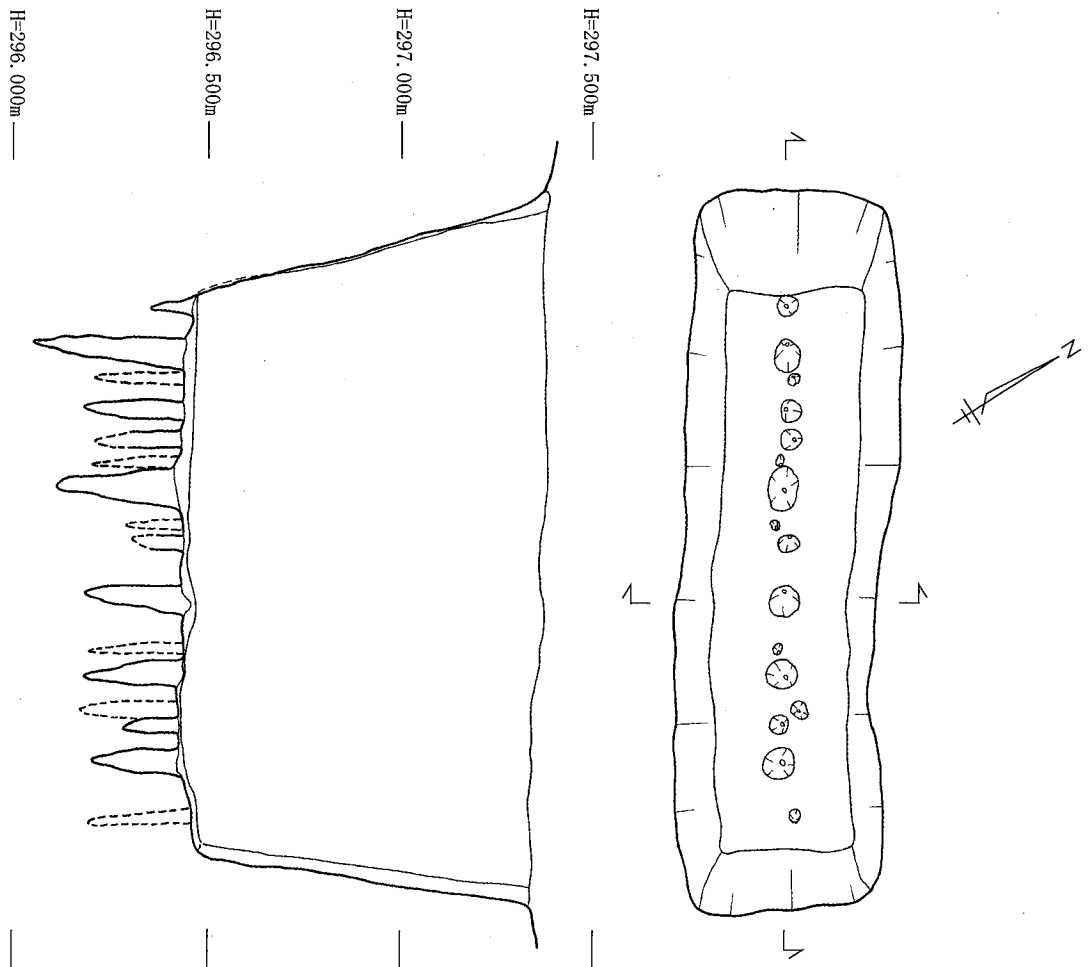
調査区東隅で、東側の土層断面に引っ掛かった状態で検出された。軸方向はN11.5°Wである。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で203.5cm・下端で180.0cm、短軸は上端で51.0cm・下端で32.0cmと、長短軸共に底のプランがやや狭い。深さは北側のみやや深くなり、60～73cmである。底からは逆茂木が10本検出された。全て2本一組の状態で検出され、片方がもう片方の逆茂木の口を壊して設置されているような形である。形状は先の尖った三角錐形で、径は大(6～10cm)・小(3～4cm)2種類あり、内訳は大5本・小5本である。ほぼ長軸上に30～35cm間隔で配置され、深さは径に左右されず、34～42cmである。なお、埋土中に逆茂木と思われる炭化木が残存していた。

### 7 G区の調査成果

G区については、試掘坑を2箇所設定して掘削したのみである。遺構は検出されなかった。

### 8 H区の調査成果(第26図)

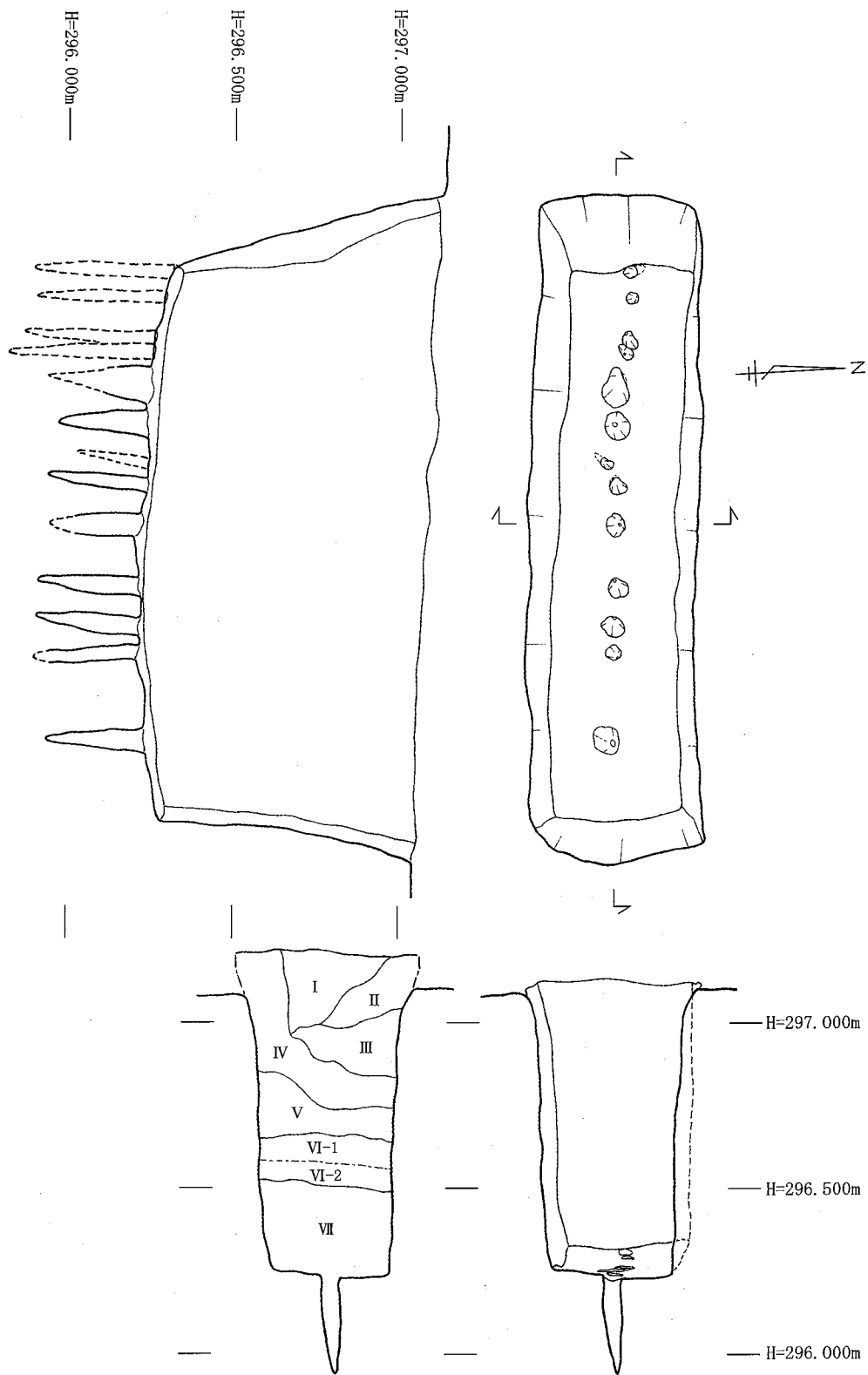
H区では、南側半分が削平を受けており、旧地形が残存しているのは、北半分のみであった。調査区の中では比較的斜度が大きく、斜面の等高線に沿った状態で陥し穴が2基(SC14・15)検出された。



- I. Hue 2.5Y 3/3 暗オリーブ褐色軟質粘質土
- II. Hue 10BG 4/1 暗青灰色硬質火山灰
- III. Hue 2.5Y 3/2 黒褐色スコリア混入粘質土
- IV. Hue 2.5Y 4/2 暗灰黄色粘質土
- V. Hue 10YR 4/ 灰色硬質火山灰(I F層)
- VI. 高原スコリア

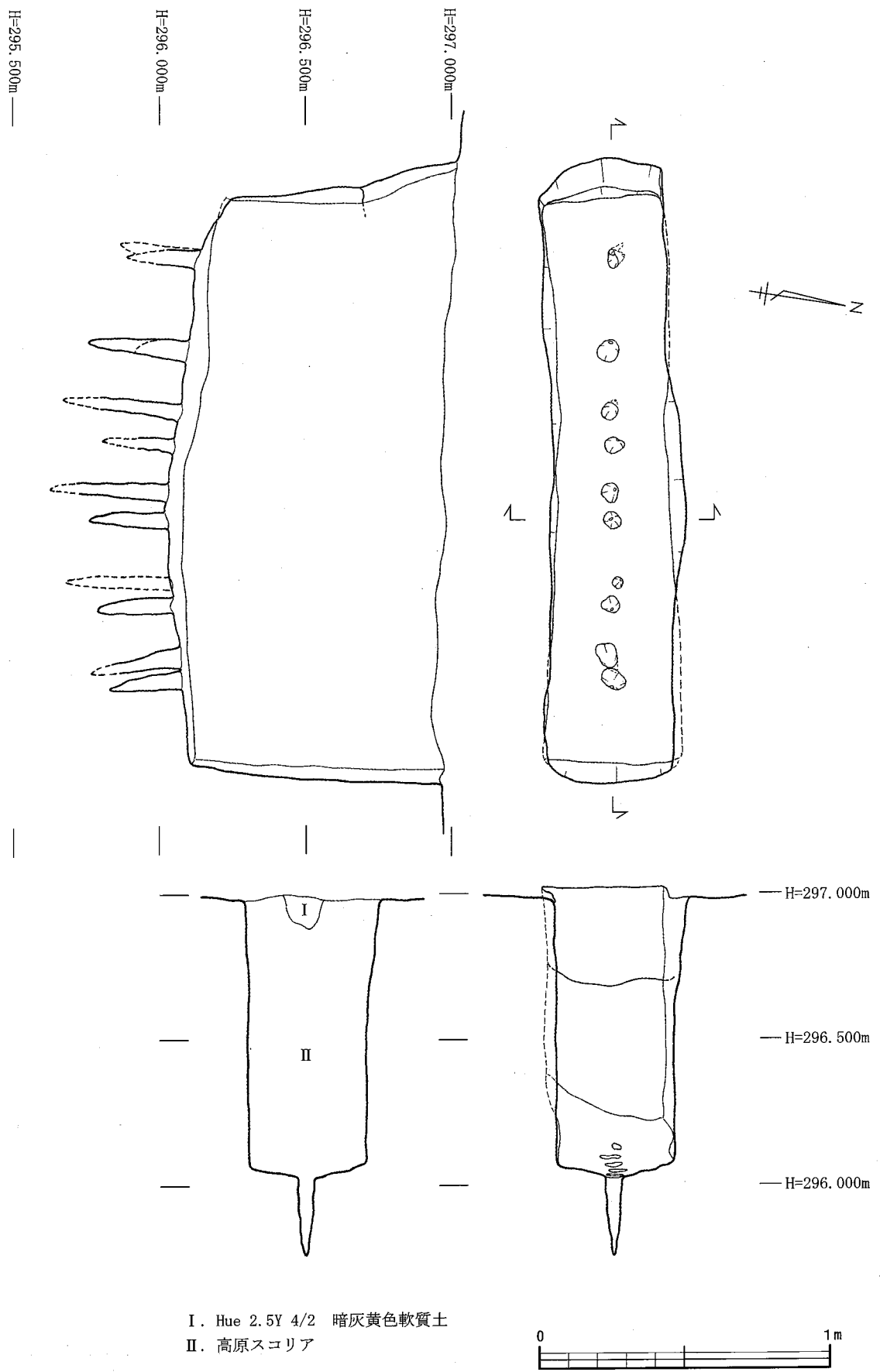


第22図 榊粉山遺跡F区SC10実測図

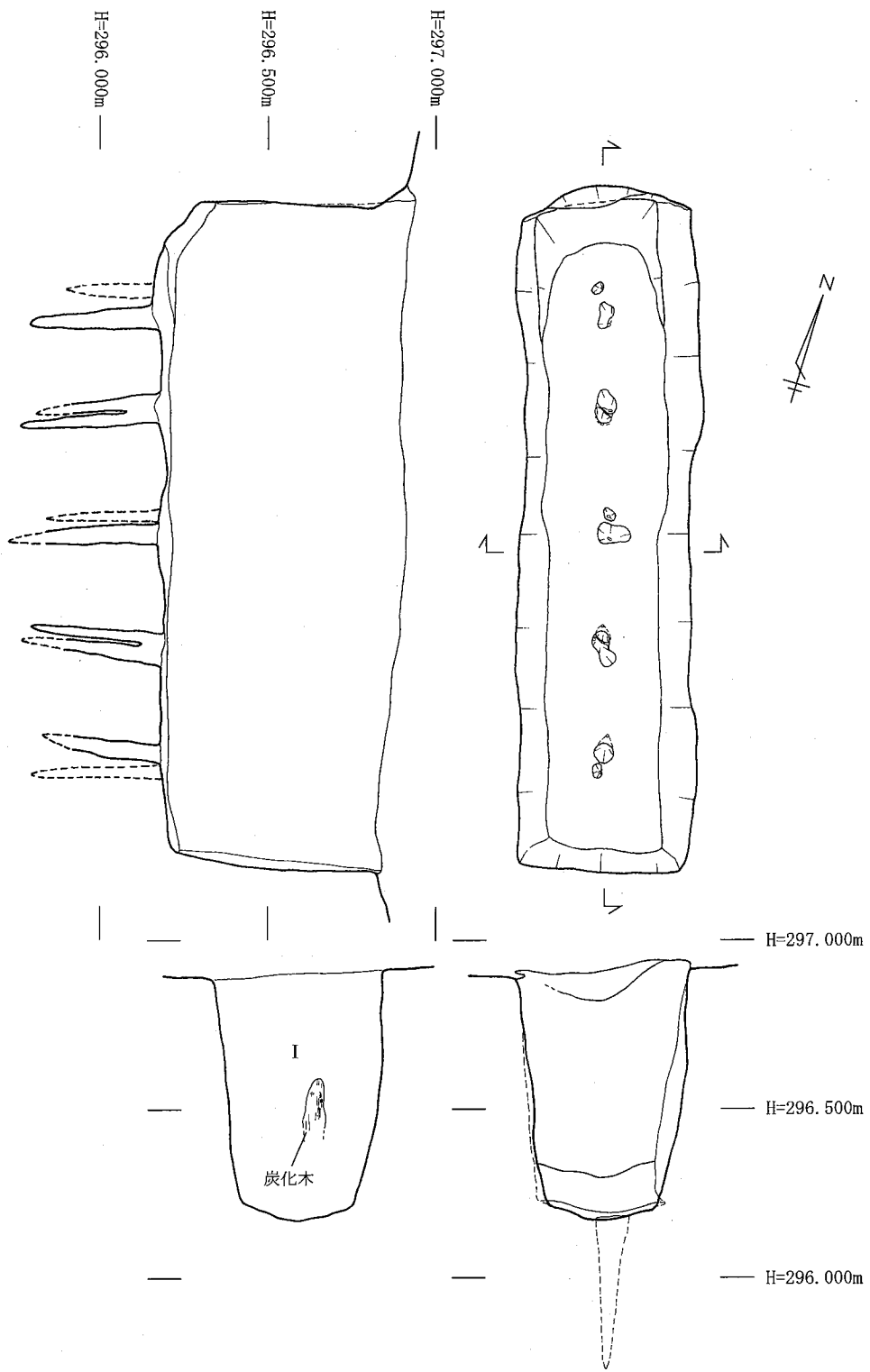


- I. Hue 2.5Y 4/2 暗灰黄色軟質土
  - II. Hue 2.5Y 4/3 褐色軟質土
  - III. Hue 2.5Y 4/1 黄灰色硬質火山灰(I F層)
  - IV. Hue 10YR 3/2 黒褐色スコリア混入粘質土
  - V. 高原スコリア
  - VI-1. Hue 2.5Y 3/3 暗褐色粘質土
  - VI-2. Hue N 41 灰色硬質火山灰
  - VII. Hue 10YR 3/4 暗褐色スコリア混入粘質土
- } 密着状態

第23図 柵粉山遺跡F区SC11実測図



第24図 榑粉山遺跡F区SC12実測図



I. 高原スコリア

上部は分層不可能な状態で軟質粘質土が混入しているが、下部は高原スコリアの純層



第25図 榊粉山遺跡F区SC13実測図

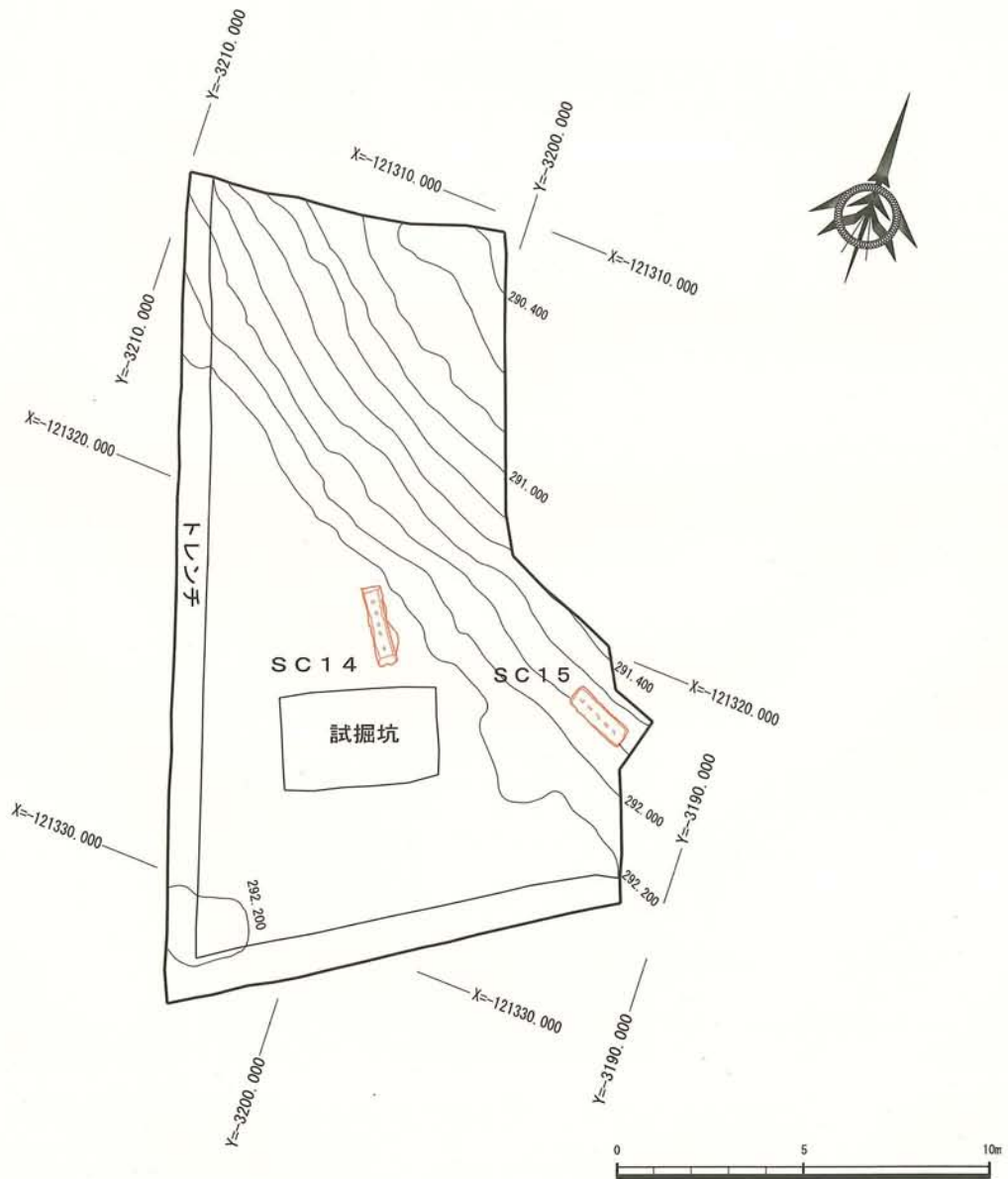


SC14 (第27図)

調査区の東隅で検出された。軸方向はN34° Wである。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で213.0cm・下端で181.0cm、短軸は上端で56.0cm・下端で38.0cmと、長短軸共に底のプランがやや狭い。深さは北西部が急激に深くなり、104~131cmである。底からは逆茂木が11本検出されたが、上端は7本のみ検出されている。形状は先の尖った三角錐形だが、形そのものはやや不明確である。長軸上に配置され、中央部の間隔がやや狭く26cm、その他は35~40cmである。径は5~10cm、深さは26~32cmである。

SC15 (第28図)

遺構上部が削平により消滅している。軸方向はN68.6° Wである。平面プランは隅丸長方形を成し、長軸は上端で191.8cm・下端で184.0cm、短軸は上端で60.5cm・下端で53.0cmと、



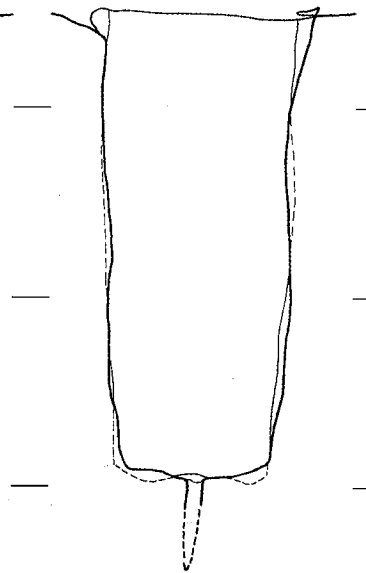
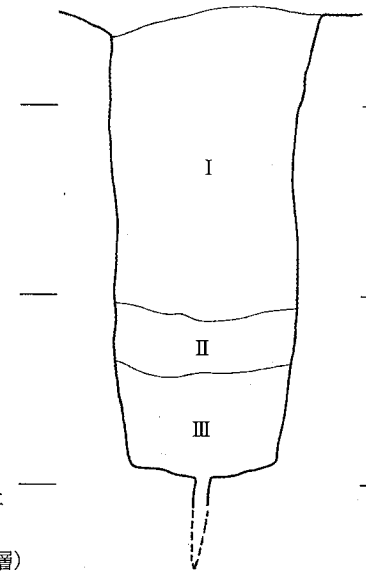
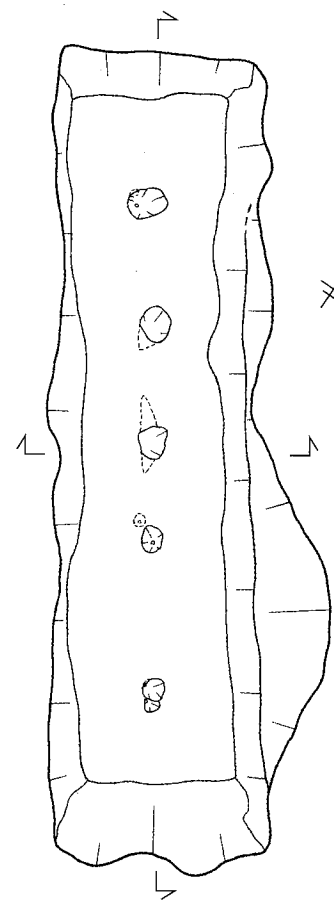
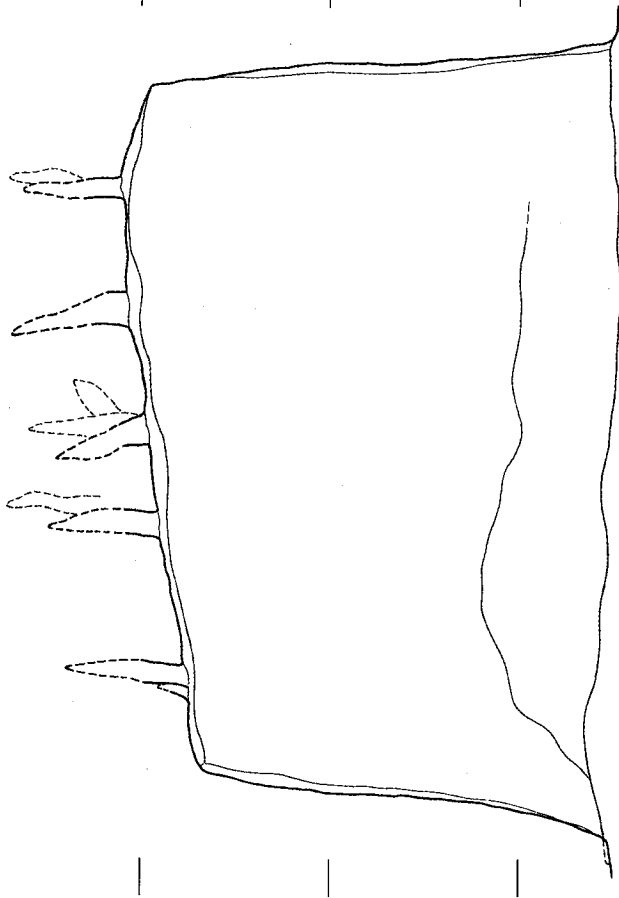
第26図 榑粉山遺跡H区高原スコリア直下面地形図

H=290.500m

H=291.000m

H=291.500m

H=292.000m

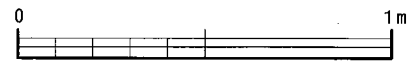


H=292.000m

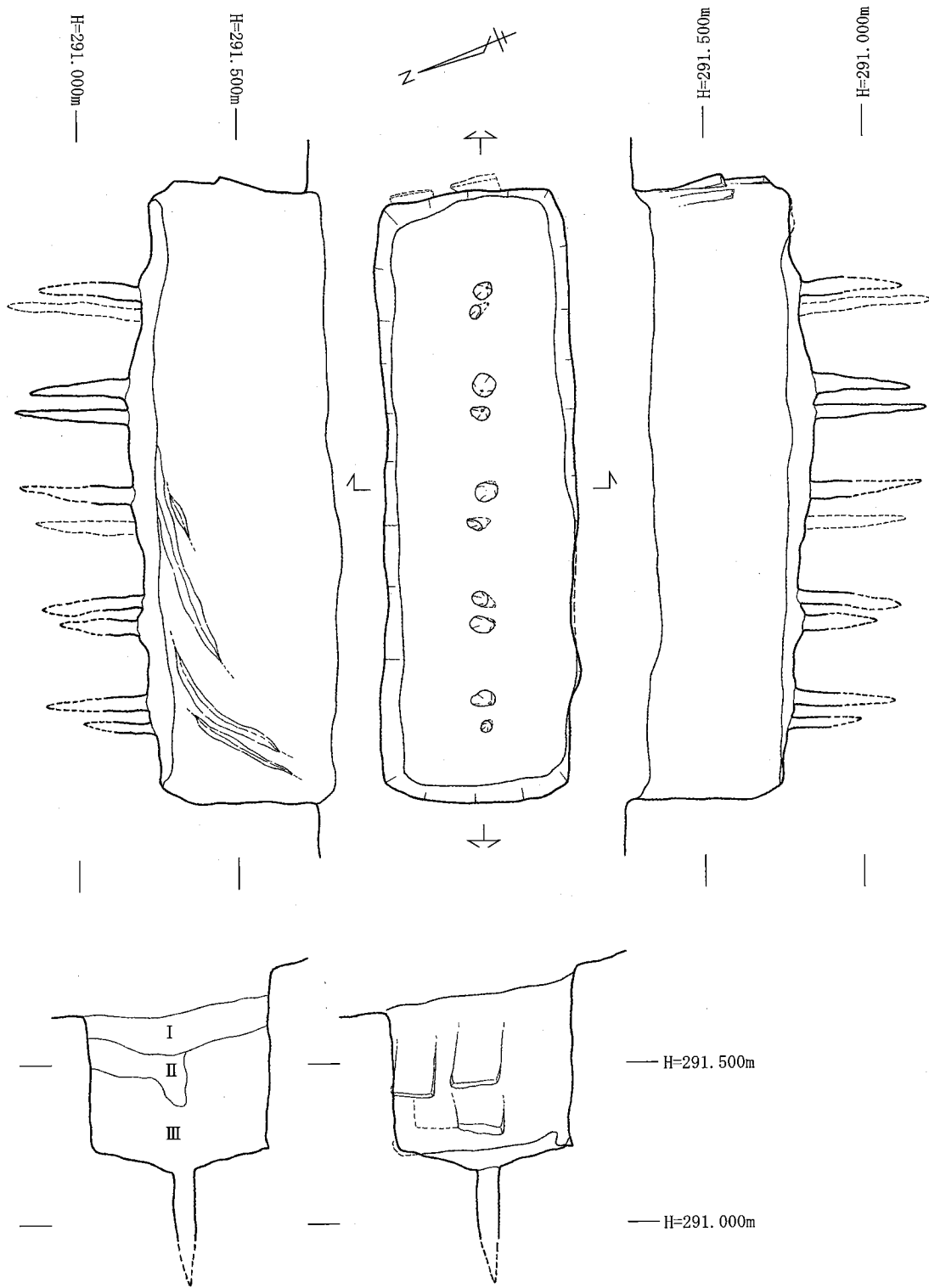
H=291.500m

H=291.000m

- I. Hue 2.5Y 5/3  
黄褐色スコリア混入粘質土
- II. Hue 5PB 4/1  
暗青灰色硬質火山灰(I F層)
- III. 高原スコリア



第27図 榊粉山遺跡H区SC14実測図



- I. Hue 2.5Y 5/4  
黄褐色スコリア混入粘質土
- II. Hue 2.5Y 5/3  
黄褐色硬質火山灰(I F層)
- III. 高原スコリア



第28図 楠粉山遺跡H区SC15実測図

長短軸共に底のプランがやや狭い。中心部でやや深くなり、深さは検出面より45～55cmである。底からは逆茂木が10本検出された。ほぼ2本一組の状態検出され、ほぼ32cm間隔で配置されている。形状は先の尖った三角錐形で、径は4～8cm、深さは3種類(23cm・30～35cm・42cm)ある。又、東部及び南部壁面に工具痕が見られた。東部側は上から下に彫り込まれた痕が3箇所見られる。工具痕の幅は15cm、方頭の手斧によるものと推定される。南部側にも中心部が深くなる形で、上弦形の工具痕が複数見られた。